資 料

繭絲繊度ご養蠶法ごの關係論文綜合抄錄 (1)

勝又藤夫・横山忠夫・横澤正雄

近年繭絲織度の問題はその重要性を認められ地方蠶業試驗場長協議會の議題の一つとせらるるに至れり。

翻つて既往に於ける繭絲繊度に開する試験調査はその數法だ多きもその公表の様式は單に之 を調査するに止り深く追究したる形跡を認め難し。著者等は之を綜合的に抄錄しその結論の得 らるものは之を求めたるが尚本抄錄により試験研究の足らざるものあることをも明かになし 得たりと信ず。

何れにせよ此の抄錄により從來の試驗の大要を示し一般の參考に登せんとする次第なり。

備考 抄錄は長野縣蠶業試驗場の圖書室にある報告、雑誌によりたり。故に此處に備はらざる論文に缺けたるが大正12年頃より後のものは殆ど余部取めたりと信ず。

| 抄錄文の部門別は大作目次に示せるが如く 4部門とし更に之を細分しその細分の各々につき結論の得らるるものは之を求めたり。

1		目	次	
I	綜合的	研究·	•••••	197
II	蠶種縣	[係部]	肾	200
	1.	生種、	黑種	比較 200
	2.			期 200
	3.			201
	4.			藏 203
	5.			、氟流 205
				206
	7.			209
	8.			の冷蔵 211
III	飼育關			211
	1.			211
	2.			. 氣流 211
	3.	飼育		. 1215
	4.	同		2220
	5.	同		3221
	6.			4223
	7. 8.			224
	9.			229
	10.			230
	11.			233
				(額で)

I 綜合的研究 (實驗例4)

蠶種、飼育法、上炭法の全般或は 2−3 の部門と 繭絲繊度との關係を調べたる報文なり。

(1) 環境が繭絲織度に及す影響の研究

味岡秀夫、武博道 鹿兒島縣蠶業試驗場報告、第21 號 昭和9年3月

催青法、飼育法及び雌雄との關係が繭絲繊度に及 す影響を知らんとし支106×日7を以て施行せり。

1. 他青法に關するもの

2. 飼育法に關するもの

稚鬣中は普通の何宵をなし 5齢期を高温育區(29.5°C),低温育區 (24°C),多濕育區 (95%~100%), 乾燥育區 (60%~70%) の 4區に分ちて試験す。その結果繊度に關する部分を見るに初秋と晩秋との飼育時期によりて一定の傾向を認め難し。繊度の開業は普通育區少く低温育區及高温育區稍々多きが如きも其の差著しからず。

3. 桑葉の硬軟及雌雄との關係

5 齢 2 日目雌雄鑑別をなし雌雄を硬葉區、軟葉區、 適葉區の6 區別としたるに繭絲織度は硬葉區細く適 葉區と軟葉區との間に於ては軟葉區稍々太き傾向あ り、繊度の開発は軟葉區稍々多く硬葉區之に夾ぎ適 葉區最も尠きが如し、倚雄繭は雌繭に比し繊度細き 場合多し。而してその開業をみるに雌繭の方大なる 傾向あり。

(2) 繭絲繊度に關する研究

內族好永、影木孫一、所正二 - 夫城縣蠶業試驗場 報告 第6號 昭和11年4月

- I 飼育環境と繭絲繊度との關係
 - 1. 鑑品種と繭絲繊度との關係(省略)
- 2. 飼育温度と繭絲繊度との關係

日110×支105を用ひ全齢、稚蠶、肚蠶に3分し各々を更に24°C區、26°C區、28°C區、30°C區と4分し計12區とし濕度は稚蠶期75%、肚蠶期も大部分を75%とせり、織度は低溫なる程太く高溫なる程細き傾向あり。然し稚蠶期溫度を異にし肚蠶期同一溫度の場合は各區殆ど差異なし肚蠶期溫度の高低は織度と密接の關係あるものの如く何れの場合にても溫度低き程織度太き傾向あり。金齡低溫區と肚蠶低溫區とは差低少なり。

3. 飼育温度と繭絲織度との關係

日110×支106を用ひ濕度65%,75%,85%,95% の4區を散く、溫度は何れも27°Cなり。更に各區に新 鮮聚給與區(95%)と透调聚給與區(80%)の2區 を酸く、繊度は新鮮聚給與の場合は濕度低き程、签 调桑給與の場合は濕度高き程太き傾向あり。

4. 飼育型式との關係

普通育、箱飼金葉育、箱飼到芽育、箱飼全芽育、 北鑑屋内條桑育、壯鑑屋外條桑育の6 属を設く、鑑 品種は歐16×支14,日110×支106,歐16×支16,歐 19×支17,日8×支17等なり。繊皮は普通育を行ひ 鑑見發育住良なる場合は太く机放育をなす時は概し て細し。

5. 桑葉の硬軟との關係

歐16, 日 110 を用ふ、壯蠶期にのみ硬、中、軟薬 を給與す。壯蠶期に軟薬岩しくは軟薬に近き桑薬を 給與する時は繊度太く硬薬給與は概して細し。

6. 施肥量を異にせる桑葉との関係

支106, 日110を用ひ全齢、稚蠶、肚蠶に分け各々 を更に無肥桑給與區、適量桑給與區、多肥桑給與區 の三國に分け9區とす、多肥料桑給與區は繊皮太く 無肥料桑給與區は概して細し。稚蠶期桑葉の差異は 繊度と殆ど關係なし。

7. 桑葉の萎凋度との關係

日110×支105を用ひ念齢、稚蠶、肚蠶の各期を失 々新鮮桑區、95%桑區、90%桑區、85%桑區、80% 桑區、70%桑區の6區に分け計18區とす、桑葉の菱 调度大なる程繊度網く新鮮なるに從ひ太き傾向あり 然し稚蠶期用桑の菱调度は殆ど關係なし。

8. 桑品種との關係

根刈仕立春秋爺用系を用ひ多初早止、春日、牧穫一、群馬赤木、改良鼠返、市平、大島祭、一の瀬、改良十文字、島の内の10品種によりて試験す。鑑品種は春は歐16×支16,秋、晚秋は目110×支106なり、繊度は春にては改良十文字最も太く群馬赤木、改鼠之に次ぎ市平、島の内最も細し、秋期にては收穫一最も太く一の瀬、島の内之に次ぎ 群馬 赤木最も 細し。

9. 荣氂劑の添食との關係

日110×支106を用ひ標準區(水), 葡萄糖區(5%), 原糖區(5%), 澱粉區(2%), 酒糖區(1%), 醋酸區 (0.5%), 青性加里區(0.5%),の7區を設く繊度は葡萄糖區最もなく原糖區之に次ぐも標準區と大差なし 醋酸區は最も細し他の薬劑を添食せる區は何れも標準區より細き傾向あり。

10. 蠶座面積との關係

歐16×支106を用ひ全齢、稚蠶、批蠶の各期を失々薄飼區、厚飼區、薄侚成桑區、厚飼多桑區の4區とし、これに全齢標準區を加へて計13區とせり。蠶座面積廣き場合繭絲織度太く、狭き場合細き傾向あれども面積自体の影響は極めて少く一般には蠶座面積の廣狭に開聯して變化する單位頭敷に對する給桑量の特成に關係するものと考へらる。而して稚蠶期の面積は繊度と殆ど關係なし。

11. 給桑景との關係

日110×支106を用ひ全齢、稚蠶、非蠶の各期を更に6分し1割增區、2割增區、3割增區、1割減區、2割 減區、3割減區とし、これに全輪標準區を加へて計 19區とせり給緊量少き場合繊度細く給緊量の増加に 伴ひ繊度太くなる傾向あり。然し稚蠶期給緊重の多 少は大なる關係なきものの如し。

12. 呼吸障害との關係

日110×支106を用ひ第5齢起鍵を標準區、片側第 4 泵門閉鎖區、兩側第4泵門閉鎖區、片側第6氣門閉 鐵區、兩側第6 氣門閉鎖區、片側全氣門閉鎖區の6
區となして試驗す。第4第6氣門を閉鎖せるものは標準區に比し約10%內外機度細く片側全氣門閉鎖區は標準區の約60%の機度に過ぎず。

13. 絹絲腺の片側剔出との關係

- 網絲腺の片側剔出を行ひたるもの極めて細く標準 - 區の約55%に相當するにいたる。

14. 上簇蠶の熟度との關係

歐16×支16を用ひ第5 輪給桑10回日より毎給桑正 前線課上簇せしむ、上簇羅の熱度未熟なる程繊度細 き傾向あり、所謂適熟程度の2回位前の熟度に達す れば適熟羅の繊度と殆ど差異なし、絲羅上簇初期の 繊度は最太繊度の40~45%內外に過ぎず。

15. 繭絲繊度と諸形質との相關々係

繊度と網絲腺重、繭重、頭体重、繭層量、絲量との相關や係は失々正にして絲長とは負の關係あり。 面して旺絲口の直徑とは殆ど關係なし。

II 上簇環境と幽絲繊度との關係

1. 鬱繭中の温度との關係

臀繭中温度20°C, 24°C, 26°C, 28°C (或は27°C) 30°C, 33°C (或は32°C) の各區を設け濕度は一様に75%とし茶は歐16×支16, 秋、喚秋は日110×支105, 日110×支106を用ふ、繊度は温度の上昇するに從ひ漸次細化するものにして特に27°C (又は28°C)と30°C (又は32°C) との間に於て差大なる傾向多し。

2. 臂繭中の濕度との關係

警繭中濕度を65%,75%,85%,95%にし温度を . 一様に27°Gにして試験せり、供試鑑品種は発は歌16 ×支16,秋、晩秋は日110×支105又は日110×支106 なり。

濕度の繊度に及す影響は温度の場合に比すれば著しく微弱なれども濕度の増加するに伴ひ繊度太く乾燥なる程細き傾向あり。

3. 鶯繭中に於ける簗劑の刺戟との關係。

標準區、フオルマリン區、酒精區、醋酸區、アンモンニヤ區、エーテル區の6 區を設け室の温濕度は25.2°C,91.5%とせり。供試鑑品種は奈は歐16×支16,秋は日110×支105を用ふ、繊度は春にては各區に大達なけれどもエーテル區、及びアンモニア區は概して太し、而して醋酸區と標準區とは細し、又秋期にてはアンモニヤ區最も太く、標準區は最も細く、エーテル區は標準區に次ぎ細し從て一般的にはアンモニア區積々太き傾向あるも他區間には大達なきが如し。

(3) 飼育並上族條件と繭絲繊度との關係

日本蠶絲學會學術講演集 第三科 昭和11年5月 水井壽一郎

鑑品種により繭絲織度に大差があるが同一品種でも何育條件上簇條件により繭絲織度に差がある。長野縣盆業試験場の 從來の研究成績より 按萃して 示す。(諡品種名は省略す)

- 1. 個青温度で15°C-26°Cでは高温が太い
- 2. 催青濕度では差がない
- 3. 稚蠶飼育温度では 20°C-28.9°C では高い方が太い。
- 4. 5船飼育温度では 20°C-28°Cでは低温が太い
- 5. 1 船飼育濕度では60%-90%内では差がない。
- 6. 5齢飼育温度では60%-94%では多温程細い
- 7. 5 齢用系では容は島ノ内の如き良桑太く、鼠 返は細い、改鼠、扶桑丸等は容夏は細いが奥秋 には太くなる。
- 8. 川黍の硬軟との關係は硬薬が細い。
- 9. 5齢給桑量との關係は給桑量少いと細い。
- 10. 5 齢鑑座面積の廣い方が幽絲繊旋は太い。
- 11. 上族時の熟度は未熟蠶は細い。
- 12. 上機室の温度20-30°Cでは低温程太い。
- 13. 上族室の濕度は多濕程細い。併し之は切斷多 い為に細く出て 來るので 實際に はそれ 程細く ない。見かけの細きによる。

(4) 飼育條件の繭質特に繭織度に及ぼす影響に 闘する分析的研究

松村季美、岡卓郎、笹崎龍雄 長野蠶試報告37號 昭和11年9月

従來の研究により繭絲繊度を太くする傾向ありと せられたる條件は次の如くである。

	侗育條件	繊皮太き條件	繊皮細き條件
1.	描立時期(养 蠶)	早椒	贮 掃
2.	他青温濕度	高溫、多濕、 明他青	低溫、乾燥、 暗催青
3.	稚蠶溫濕度	高溫多濕	低溫、乾燥
4.	稚蠶桑品種(夏秋蠶)	島ノ内	一ノ瀬桑
5.	稚蠶給桑量	標準量	三割减量
6.	业鑑温濕度 (养蠶)	高温、乾燥	低溫多濕
	同(夏秋蠶)	低溫、乾燥	高溫多濕
7.	壯蠶桑品種 (春蠶)	改良鼠返	鼠返
	同 (夏秋蠶)	島ノ内 -	- ノ瀬(扶桑丸)
8.	非:蠶業菜質	枝條上1/3	枝條下1/3
9.	北鐵給桑量	標準量	四割减
10.	非蠶蠶座面積	小頭數 (尺坪 70)	多頭數 (尺坪 130—110)

此の條件を全部太くするものと、全部細くするものとの二區を對照區とし、その前者に對しては細くする條件を各個別に一つ宛置換し、後者に對しては太くする條件を各個別に一つ宛置換して合計20區を設定し、彼我相對照して分析的に各個の個育條件の繊度に及ぼす影響を試驗せり。

供試諡品種は春は安泰×歐18,平和×安泰,夏秋 は支106×日110,平和×安泰なり。

尚本報告に於ては此等飼育條件の絲長、絲量、額節、繭重、繭層重、繭層歩合、蟲質に及ぼす影響を も試験せり。

繭繊度に及ぼす影響の概要次の如し。

- 1. 掃立時期早ければ晩き場合に比し繊度太きと と確實なり。
 - 2. 健青温濕度の高低は繊度に一定の影響なし。
 - 3. 稚蠶高温多濕は低温乾燥に比し太き場合7例 等しき場合2例、細き場合3例、即ち稍々太く する傾向あり。
 - 4. 稚蠶桑品種は島の内と一ノ瀬との間には繭絲 繊度に對し一定の傾向なし。
 - 5. 稚蠶給桑量は多き區が少き區より繊度太き例 7 等しき例 1 細き例 4 にして稚蠶給桑量多き 程繊度太き傾向あり。
 - 6. 非鑑溫濕度は夏秋期に於て高溫多濕は低溫乾燥に比し纖度太き場合3例、細き場合6例あり。 即ち夏秋期は低溫乾燥は高溫多濕に比し纖度太からしむる傾向あり。
 - 7. 肚蠶桑品種、秦期改良風返は鼠返に比し繊定 太くなる。夏期島ノ内と一ノ瀬は差なし。秋期 扶桑丸は島ノ内に比し等しき例2, 細き例2にて 大体扶桑丸は島ノ内に比し細くなる傾向あり。
 - 8. 壯蠶聚葉質、枝條の先端 2 を給與すれば枝條 の下部 3 を給與したるものに比し繊度太きとと 確實なり。
 - 9. <u></u> <u>北</u>鑑給桑量、多量區は少量區に比し太きこと 確實なり。
- 10. 非鑑鑑座面積廣き場合は狭き場合に比し繊度 太き例8. 細き例4あり。即ち鑑座廣ければ繊 度を太くする傾向あり。
- 11. 細の全條件は太の全條件に比し平和×安泰に ては発は22.5%, 夏は17.0%, 秋は22.0%細く 安泰×歐18にては発は27.2%細く、支106×日 110にては夏は13.2%, 秋は10.5%細し。

◎本報告の此等繊皮の太細の飼育條件と絲長、絲 量、額節、繭重、繭層重、繭層步合、虫質との關係 は省略する

◎最後に育蠶上繳旋を細からしむる條件にて何育 すれば蠶作を不安ならしめ、繭質を不良ならしむと。

II 蠶種關係部門

蠶種に於ては生種及黑種、蠶種製造時期、次代影響、蠶種保護冷藏、惟青溫濕度及氣流、人工孵化、 其他、蠶麵蠶螺の冷蔵の8項目に分ち夫等と繭絲織 度との關係を調べたるなり。

蠶種の(1)生種 及黑種(實驗例4)

黒種より孵化したる蠶児の繭絲繊度は垂種より孵化したるものより太し。

(5) 夏蠶生種黑種比較試驗

売木武雄 京都鑑壽試験成績第25號 明治45年5月 以形種を用ひ生種と黒種とを比較したるに幽絲織 度は概して黒種の方本し。

(6) 蠶種生種黑種比較

完木武雄 京都籔淵武驗成績第25號 明治45年5月 二化性白龍を用ひ想種採種思種、生種操種思種、 夏蠶生種貯藏、秋蠶生種の4區別としたるに繭絲織 度は一定の傾向を示さざるも思種操種懇種區は生種 採種思種區より太し。

又白龍にて黒種、秋蠶生種、夏蠶生種貯蔵種を比較したるに蘭絲繊度は夏蠶生種貯蔵區太く他は差な 1

矢の羽を用ひ黒種、秋蠶生種、二化性三化種を比 較したるに繭絲繊度は黒種區太く他は差なし。

(7) 黑種生種比較驗試

茨城縣第二蠶試: 茨城縣第二蠶試試驗成績第二號 大正14年10月

電品種は日106×支8を用ひ生種黒種の比較試験を 行ひたるに繭絲織度は夏期には生種區太く秋期には 差異なし。

共他、(438)

蠶種の(2) 蠶種製造時期(貨験例7)

採種時期による繊度の差異は殆どなきも採種時期 の趣るるに從ひ稍々太くなる傾向あるものの如しa

(8) 春蠶種製造時期試驗

荒木武雄 京都鑑講鑑事報告第18號 明治49年3月 小石丸を用ひたるに六月區は八月區より太き事あ リ又細き事ありて一定ならず。

(9) 秋蠶黑種製造時期試驗

· 荒木武雄外2名 京都蠶讚試驗成績第23號 明治 45年3月

小石丸は6.7.8月採、以形は7.8.10月早採、10月晚

探矢ノ初は8.10月探とせば繭絲繊度は小石丸は7月 探太く以形は概して採種時期の遅るる程太く、矢ノ 初は8月採10月採用に差なし。

(10) 夏耀黑種製造時期試驗

· 荒木武雄外 2 名 京都鴛講試驗成績第23號 明治 45年 3 月

以形種を用び7月探と8月探とを比すれば繭絲繊度は8月探称々太し。

小石丸を用ひ6月採、7月採、8月採を比すれば繭 総繊度は採種時期遅きもの程太し。

(11) 採種時期の異る品種の同一時期飼育に就て

人保井黨悟 衣禁蠶報297 昭和6年5月

日1及び支9を用ひ茶採種及び秋採種のものを比較せり。 繭絲織斑は茶採種のものは秋採種のものより 常に太い傾向あり。

(12) 採種時期を異にする 春蠶一化性交稚種の蟲質 繭質に關する比較試驗

味岡秀夫、福滿直二 庭兒鳥蠶試報告第4號 昭和6年8月

供試器品種は 験7×支7, 支7×験7, 日1×支4, 支4×日1を用ひ発採種區と秋採種區とに分つ繊度 は常に秋採種區の方箱々太し。

(13) 採種時期の蠶作に及ぼす影響

大宮新左衞門 衣笠蠶報第340號 昭和9年12月 2月採(台灣)、5月採(台灣)、7月採(山形)、9月採 (山形)、10月採(山形)、人工孵化(沖縄)の6區とし 普通育と高温多濕を行へるに繭絲繊度は概して採種 時期の遅れるに從ひ細くなる傾向を認む。

(14) 原蠶の飼育時期と次代蠶の關係試驗

大須賀友衞、藤田啓三 愛知縣蠶業試驗場乘場 No.2 昭和11年3月

原鑑の飼育時期を春、秋、晩秋とし、次代鑑飼育時期は何れも春とし歐18,支14を普通育にて飼育す。

試験區は春期、秋期採種のものは天々春、秋天然區として採種後天然保護をなし、晩秋期のものは天然保護及採種後7日、14日、21日、30日、約22°Cに保温し各區共對照區と浸酸區に別ち浸酸區は塑养個青前に浸酸處理をなす。以上の下に試験せるに次代鑑に於ては繊度は各採種期、各區間に判然たる一定の傾向認め離し。

蠶種の(3)次代影響(資驗例17)

原蠶飼育に於ける極端ならざる溫濕度、給桑型式の差異は次代の繭絲織度に殆ど影響を及さず。飼料の硬軟用桑品種の差異も又然り。但し極端なる榮養障害は次代の繭絲繊度に大なる影響を及す。

(15) 夏蠶生種の 原鑑飼育温度と貯藏に對する耐 久力との關係試驗

院木武雄、三浦英太郎 京都鑑講試験成績第25號 明治45年5月

自能を用ひ飼育温度を常温(平均72°F)及高温(平均78°F)にて飼育したるに次代蠶の繭絲繊度は常温 區太し。

宮島徳一郎 上田蠶期同窓會報(9)大正11年10月一化性、靑熟、新昌長、アスコリビセノ二化性新河内を用ひ希蠶期に飼育し給桑回數を12回より上族に至るまで 30 數回に分ちたるに繭絲織度は第一代に於ては各品種共給桑回數多きに從ひ太くなり熟蠶に於て最も太し。第二代を普通育をなせる場合及び高温多濕育を行へる場合共に前代の榮養と正比例せる織度を示す。第三代、第四代に於ては第一代の榮養の影響なし。

原뾃飼育に関する試験

坂本宇一外4名 愛知鑑試報第4號 大正15年9月 春蠶期供試鑑品種は日1を用ひ試験區は

			工制	24 開介	3 齡	4 齡	も齢
標	M	ME	剉桑	到芽	闹	间	全芽
邻	1	厰	剉桑	[6]	[7]	全芽	间。
第	2	ME	到芽	间。	ति	全芽	间
郅	3	166	全事	闹	[ri]	jrij -	[ri]
銷	4	M	剉桑	剉芽	闹	全芽	[ri]
郅	5	区	剉桑	全芽	间	[ři]	[ក្ស
第	6	雁	剉聚	剉芽	全芽	ក្	[11]
錧	7.	186	剉聚	剉芽	[ri]	全芽	條築
筇	8.	M	剉桑	剉芽	全芽	條桑	同
筇	.9	186	剉桑	全芽	[ក]	條築	间
第	10	膩	全芽	[7]	[ri]	條築	间
纺	11	腿	條聚	同	间	间	[6]

としたるに原蠶繭絲繊度は標準區最も太く第5區 之に亜ぎ第3區最も細し。

次代鑑の繭絲織度は容期側育に於て第6區最も太 く第8區、第4區、第2區の順に之に次ぎ第10區、 第5區第9區等細し。

秋耀期

	1. 齡	2 齡	3 齡	4 龄	5 龄	
第1區	剉茶	[ñ]	間	闹	全菜	普通蠶箔
第2區	企業	间	[6]	间	间	普通蠶箔
第3區	剉桑	[7]	间	闹	全薬	平面蠶箔

第4區 全葉 同 同 同 同 同 平側監箔 としたるに原蠶の繭絲繊度は第3區最も太く第2 匯最も細し。次代蠶の秋期飼育のものの繊皮は原蠶 同様第3 區最も太く第2區最も細し。

(18) 用桑の次代蠶に及ぼす影響試験

(19) 原蠶飼料としての桑の品種に關する調査

(1) 茶瓢期

原鑑(支4)では第2 賦最も細く他は大差なし。次 代鑑では第1 賦最も太く第4 賦最も細く他は中間。

(2) 初秋期

支101を用ひたるに繭絲織度は原鑑では概して第 2 區最も細く標準區第1 區之に夾ぎ第4 區最も太し 次代鑑は第1 區、第3 區細し。

又、全齢赤市、和助十文字、各薬及び4齢迄赤市 5齢咎桑、1齢和助十文字234齢青市、1.5 齢咎 桑234齢青市、15 齢赤市234齢青市、4齢迄 赤市5齢和助十文字の場合は繭絲絨度は原鑑では1 5齢咎桑2、3、4齢青市區特に太く1齢和助十文 字2、3、4齢青市ら齢咎桑區最も細く全齢赤市區之 に次ぐ。次代鑑では4齢迄赤市5齢和助十文字區、 4齢迄赤市5齢咎桑區最も太く1齢和助2、3、4齢 青市5齢咎桑區特に細く他は中間。

(20) 5齢用桑の硬軟と次代蠶との關係に就て

宗像常譽 群馬縣蠶試樂報 第1號 昭和5年6月 供試蠶品種は日110なり、甲乙2螺區を採り5齡 期より各々に分れて硬薬給與、軟薬給與とし營繭化 蝦後次の4形式に組合せて次代蠶供試材料とせり。 即ち硬區(甲螺硬薬給與雌×乙螺硬薬給與雄)軟區 (甲螺軟薬給與雌×乙螺軟薬給與雄)、硬軟區(甲螺 硬薬給與雌×乙螺軟薬給與雄)、軟硬區(甲螺軟薬給 與雌×乙螺破薬給與雄)に分ちて飼育す、繊度は當 代に於ては各區間大達なきも硬區最も太く軟區最も 細し而して次代に於ては硬軟區最も太く硬區最も細 し。

(21) 秋鑑期に於ける用桑の硬軟が次代鑑に及ぼ す影響試験

田口惣一郎、月尾真義 埼玉蠶壺第7 昭和 6 年2 月供試蠶品種として日 107 を用ひ、原蠶を硬葉育、 軟薬育、中薬育をなせるに次代蠶の繭絲繊度には一 定の影響を及ぼさず。

(22) 原鑑飼育中に於ける障害が次代鑑兒に及ぼす關係試驗

福島縣蠶業試験場 福島蠶武報告 4 號 昭和8年3月 支4,支102を供試し原蠶は普通育、種蠶給発 5 割 減、各齡盛食期低溫多濕(15.5°C 90%)各齡盛食 期高溫乾燥(32.2°C 60%)、各齡盛食期高溫多湯 (32.2°90%)の各區を作り次代は普通育とす繭絲 織度に關しては原蠶にては各齡盛食期高溫乾燥、各 齡盛食期高溫多濕の障害區が細い。次代蠶にては一 定の傾向がない。

(28) 稚蠶飼育中に於ける濕氣が次代蠶に及す 影響試驗

発田庄七 和歌山縣蠶試報告14號 昭和10年5月 支16につき原蠶と次代を小湯、中湯、多湯に飼育 せるに繭絲織度は中濕區が太い傾向あるもその程度 僅かなり。

(24) 原蠶種製造と桑品種との關係試驗

福島縣蠶業試驗場 福島蠶試報告5號 昭和10年 7月

日110,支103, 歐18,支14,支106につき赤木、 十島、改良鼠返、脊闕野桑、市平、大薬、市平鶴田大 葉鶴田の各品種を給與して試験せるに次代臘の繭絲 繊度は一定の傾向を認められず。(次代鑑は普通育)

(25) 山桑給與の原 (25) 山桑 (25) 山桑

橋本作治、横田伊瀬 青森縣蠶試報 第3號 昭 和11年3月

全齡培養桑給與、全齡山桑給與、12 齡山桑 345 齡培養桑給與、稚蠶山桑肚蠶培養桑給與、稚蠶培養桑給與、稚蠶培養桑給與、稚蠶培養桑給與、種蠶培養桑給與の5屆より採種し次代蠶を秋、奈に飼育せるに繭絲織度は秋期飼育の場合は原種平均成績にては全齡培養桑給與區に比し全齡山桑給與區、12 齡山桑 345 齡培養桑給與區僅如に太く他2區は細し。交雜種平均成績では 12 齡山桑 345 齡培養桑給與區僅如に太くその他の區は何れも稍々細きを示せり。茶蠶飼育の場合は平均成績にて原種は全齡培養系給與區に比し何れも稍々細く交雜種は稍々太しと雖も大差なし。(供試蠶品種は茶は支16,歐18、支16×歐16,歐18×支16秋は日7,日110支106,日110

×支106, 日7×支106)

.其他(14),(188),(270),(294),(329),(368),(448)

蠶種の(4)蠶種保護冷藏 (資験例13)

濫種の保護は自然に放置せるものより適常の時期に冷凝保護せるものに於て繭絲織度太き傾向あり。冷凝温度は 2.5℃~5°.0℃ 位が最も太く、冷凝時期の余り遅れたるものは細し。

(26) 風穴飄種の貯藏溫度の變化に闊する試驗

水井壽一郎外2名 東京鑑講試験成績第42號 明 治44年4月

(1) 貯蔵前期に於ける温度の變化試験

背熱種を2月15日より -5°C, -2.5°C, 0°C, 2.5°Cに冷藏し2.5°C以外のものは貯藏後各20日、40日60日にて2.5°Cに移しおき7月10日掃立てたるに繭絲繊度は前期貯藏温度高きに提ひ太く、各温度共40日 區は太き傾向あり。

(2) 貯蔵後期に於ける温度の變化試験

青熟種を 2月15日に 2.5°Cに 貯蔵 5月31日取出しー 2.5°C, 0°C, 2.5°C, 5°C, 7.5°C, 10°C, 12.5°Cに 貯蔵する事20日、40日、60日、80日にて取出した。 繭絲繊度は 2.5°C 區段も太く5°C 區之に次ぎ12°C 區 最も細し。

(27) **風穴蟹種の貯藏溫度と期間とに關する試驗** 水井蒜一郎外2名 東京鑑調試驗成績第42號 明治 44年4月

2 化性 1 化越年の青熟種を とり 2 月20日午前10時に-2.5°C,0°C,2.5°C,5°C,7.5°Cに60日、80日、100日、120日、140日、160日、180日、200日、220日貯蔵に分ちたるに繭絲織度は100日乃至140日間貯蔵の場合は2.5°C賦長も太く7.5°C賦最も細き傾向あり。160日乃至180日貯蔵の場合は0°C賦、2.5°C賦最も本く-2.5°C賦最も細し。貯蔵期間と織度との關係一定ならず。

(28) 越年蠶種貯藏溫度試驗

横口長太郎 外2名 東京蠶譜試驗成績第44號 叨 治45年2月 •

1 化性又背及 2 化性背熱を用ひ貯瀬温度により一2.5°C,0°C,2.5°C,5°C,7.5°C,10°C,河進の7區としたるに繭絲織度は又背では —2.5°C 配最も太く7.5°C 區之に次ぎ河進區最も和し。 青熟では2.5°C,7.5°C 阿區最も太く0°C,5°C 區之に次ぎ—2.5°C 區最も和し。

(29) 越年種貯藏溫度試驗

荒木武雄 外2名 京都蠶講試驗成績第25號 明治 45年5月 小石丸及び白龍を用ひたり。試験區は

第1區 12月50°F、1月45°F 2.3.4月40°F

第 2 區 12月1月45°F2.3.4月40°F

第3區 12月45°F1.2.3.4月40°F

第4區 12~4月40°F

第5區 12月50°F1.4月45°F2.3月40°F

266 版 12.1.4月45°F 2.3月40°F

第7區 12.4月45°F 1.2.3月40°F

第8届 12.1.2.3月40°F 4月45°F

小石丸では第2個最も太く第4個、第1個之に次 ぎ第3個最も細し。

白龍では第1 區最も太く第5、第8 兩區之に次ぎ 第2、4、6、7 區細し。

(30) 秋뾣黑種貯藏器容積試驗

完未武雄 外2名 京都穩壽試驗成績第25號 明治45 年5月

(1) 矢の羽種を用ひ1立突内收容蝦敷を50駅、100 蝦200 駅としたるに繭絲織度は50蝦属細し。自龍では250蝦、300蝦、350 駅としたるに繭絲織度は三者 間に大差なきも蝦敷多きもの程細き傾向あり。

(31) 秋蠶黑種貯罐溫度試驗

荒木武雄、三浦英太郎 京都鑑講試驗成績第25號 明治45年5月

- (1) 白龍種を用ひ標準區 (2月1日35°Fに貯蔵)、2 辺區 (標準區と同様のものを冷蔵末期2週間45°Fに 保護)、3 週區 (同45°Fに3週間保護)、4 週匯 (同4 週間)、5 週區(同5週間)、6 週區(同6週間)としたる に臨絲線度は5 週區、2 週區特に太く他は大差なし。
- (2) 自龍を用ひ2月1日35°Fに貯藏し第一區(後38°F60日、40°F80日、45°F20日貯藏後出箱)、第二區(同45°F30日) 第3區(後38°Fに移し後40°F60日45°Fに20日貯藏後出箱)、第四區(同45°Fに30日)としたるに第3區最も太く第4、1區之に次ぎ第2區額し。

(32) 夏蠶生種の原蠶飼育溫度と貯藏に對する耐 久力との關係試驗

荒木武雄、三浦英太郎 京都鑑識試驗成績第25號 明治45年5月

2個品種は2化性白龍を用ひた。試験區は

第1區 11月天然12月45°F 1月1日貯藏

第 2 區 11月天然12月42°F 以後同上

第 3 區 11月天於12,1月40°F 以後同上

第4區 11月天然12月42°F 1月40°F 2月1日貯 竅

第5屆 11月45°F 12月42°F 1,2月40°F3月1日.

貯滅

第6區 11,12月同上1,2,3月40°F 4月1日貯藏

第7區 3月迄同上4月40°F 5月1日貯藏

第8區 11月50°F 12月42°F 1.2月40°F 3月1日 貯蔵

第9屆 2月迄同上3月40°F4月1日貯藏

第10回 3月迄同上4月40°F 5月1日貯藏 としたるに繭絲繊度は第4匹最も太く 第3、2、7、10の順に之に次ぎ第1、6、 5、8區細し。

(33) 風穴種蠶種の再貯蔵試験

構田長太郎外2名 東京鑑講試驗成績第47號 明治 45年6月

2 化性青熟を用ひ再貯藏の日敷を10日、20日、30日の3區とし各區を更に標準區及2日目より11日目に 至る計11區としたるに潮絲織度は再貯藏日敷長きも の程納く再貯藏の時期と繊度との間には一定の關係 なし。

(34) 風穴種蠶種の貯藏前保護溫度に關する試驗

構口長太郎 外2名 東京蠶講試驗成績第45號 明治 45年6月

- (1) (a) 小石丸、青熟を用ひ 10月31日迄70°F以上に保護し以後普通氣温中におくものを標準とし11月1日より5°F, 10°F, 15°Fにて保護の 3属は更に3分し甲は1月1日以後、乙は1月31日以後、普通氣温中に移し丙は3月1日まで上記温度にて保護するに繭絲繊度は1化性では標準區最も太く5°C區之に大ぎ15°C 區最も細し。2化性では5°C區最も太く標準區最も細し。
- (b) 2 化性では繭絲繊皮は 15°F 風最も太く標準 風最も細し。
- (2) 貯職温度を -5°C, -2.5°C, 0°C, 2.5°C, 5°Cとし貯職期間を60日、80日、100日、120日、140日160日、180日、200日とし各々を2日、4日、6日、8日 間一定の高温に接觸せしめたるに潮絲繊度は貯藏日敷の120日間底では貯蔵温度0°Cのもの最も太く-5°C區、2.5°C 区之に次ぎ他は大差なし。160日貯蔵區では貯蔵温度低きに從ひ太し。

(35) 蠶種貯蔵に関する試驗

德烏縣蠶業試驗場 德島蠶試報告 4號 大正15年 3月

日 1×支101 日107×支9×支101 日107×支101 を用ひ、2月20日、3月20日、4月10日貯蔵庫に入れたり繭絲繊度は日 1×支101が4月10日入庫のもの細

きも他には特別の傾向なし。

(36) 蠶種保護試驗

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告14號 昭和5 年3月

日1, 支4, 歐7, 支7, 歐7×支7, 日110, 支102を 用ひ冷線單保護、鑑室内放置、建物の舶下に自然に 放置せるものを設けたるに繭絲織度には一定の傾向 なし。

(37) 春蠶種の貯藏法に關する試驗

岡山縣蠶試 岡山蠶試報第2號 昭和8年3月

電品種は日1×支4、歐7×支7、歐16×支14、支15
×支105を用ひた。

試驗賦

- 第2属 2月中旬まで鐶種屋におき以後3月初旬まで3°C以後3月中は3.5°C4月より催青済 手迄4°Cに保護
- 第3 区 2月中旬迄蠶種庫、以後3月初旬まで3.5 °C以後3月中は4°C,4月より個青許手迄 4.5°Cに保護
- 第4區 2月中旬迄蠶種庫、以後3月初旬まで85°C 以後3月中4°C, 4月より他青剤平迄4.5°C に保護
- 第5區 2月中旬迄蠶種扉、以後3月初旬迄 3.°5C 以後3月中4.5°C,4月より他青濟手迄5.5 °Cに保聽
- 第6區 2月中旬迄蠶種庫、以後他青清手迄尙蠶 種庫內に天然に保護

繭絲織度は年により傾向同じからざるも、昭和 5年には日1×支4では第3、第5區太く第4、第1區 細し。歐7×支7では第2區最も太く第5區最も細し。昭和6年には日1×支4では第5區最も太く第1、第2區細し。歐16×支14では第1區最も太く第3區 最も細し。

昭和7年には支15×支105では第4、第5属太く第3 區最も細し、歐16×支14では第4、第5、第1 區太し。

(38) 冬期間に於ける蠶種保護に關する試驗

伸野良男 群馬縣蠶試報告第22號 昭和10年8月 1. 他青寿手まで自然気温に保護したる場合

支13, 支14, 支15, 歐16, 歐17, 群黄2, 群黄11, 日1, 支4, 支102, 支105, 日 110, 群馬浙江を用ひ 自然氣溫保護區と合理的冷藏保護區に分けたる場合 に繊度に於て自然保護區の僅かに大なるは支18,支 14,歐16,群黃2,群黃11,日1の6例にして他の6例 にありては冷藏保護區に於て遙かに大なり。

2. 孵化に至るまで自然氣温に保護したる場合

支15×支105,支14×歐16,日7×支106,日110×支106,支14,歐18,日110,支105を用ひ自然氣温保護區と合理的冷藏保護區と蠶室保護區とに分けて試験せるに繊度に於て自然保護區の大なる場合は支15×支105,支14の2例にして他の7例にありては冷藏保護區最も大にして蠶室保護區に於て常に細し。

蠶種の(5)催費溫濕度及氣流 (質験例18)

繭絲繊度は催背温度が適温か又はそれより稍々高 き場合に太く、催青温度は適濕又は稍々少い場合に 太く、又氣流とは何等關係なきが如し。

(39) 凝種催害試驗

土屋 漆 水井壽一郊外 2 名 東京蠶事報告第38 號 明治42年2月

小石丸、大白龍、又背、青熟を用ひ標準區、乾燥 區濕潤區に分ちたるに謝絲織度は概して乾燥區最も 太く標準區、濕潤區は殆んど差異なし。

(40) 生種の保護試驗

水井壽-郎 外3名東京蠶事報告第40號 明治48年 3 月

- (1) 置品種は大自龍を用ひ生種保護を分ち標準區 高温區、低温區、温度激變區、乾燥區、濕潤區、濕 度激變區としたるに繭絲織度は標準區、乾燥區最も 太く濕潤區、低温區之に夾ぎ高温區最も細し。
- (2) 蠶品種は新屋を用ひ生種保護中を(1)と同一 區分をなしたるに高温區最も太く濕潤區之に次ぎ低 温區最も細し。

春蠶種催害試驗

(41) 荒木武雄 外2名 京都鑑講鑑事報告第18號 明 治48年3月

(1) 温度に關する試験

小石丸を用ひ 65~85°F にて個青せるに繭絲繊度 は概して70°F區最も太く75°F區、65°F區之に次ぎ8 0°F,85°Fと次第に細くなる。又標準、平溫、激變、 急高の4 區では平溫區最も高く急高區最も細し。

(2) 濕度に關する試験

小石丸を用ひ標準、乾燥、濕潤、濁布、撒水に分 ちたるに繭絲繊度は濁布區最太く、標準、乾燥、濕 潤3區は殆んど差異なく撒水區最も細しo又標準、乾 燥、濕潤の3區に付き行へる實驗によると乾燥區は 精々濕潤區より太き傾向あり共に標準區より太しo

(42) 夏蠶抑制種催害溫度試驗

田邊傳太郎 京都蠶事報告第21號 明治44年3月 以形種を用ひ約1ヶ月37°Fに冷蔵し之を取出し て70°F,75°F,80°F,85°F,90°Fにて催害せるに 繭絲繊度は80°F區、75°F區太〈85°F區、70°F區稍 々細し。

(43) 春蠶種催青溫度試驗

田邊傳太郎 外2名 京都蠶事報告第20號 明治44 年3月

小石丸を用ひ試験區は他情温度と孵化に至る日敷により7日間甲區(70°Fより80°Fに漸進)、7日間乙區(75°F)、10日間甲區(65°Fより73°Fに漸進)、10日間乙區(70°F)、12日間區(65°F)、14日間區(60°Fより70°Fに漸進)、16日間區(63°F)、20日間區(60°F)、標準(天然温度)に分ちたるに繭絲繊度は他情温度の高低と一定の傾向を認め難きも他青日敷の相等しき時は漸進法によるもの繊度稍々太し。

(44) 夏蠶生種催靑溫度試驗

田邊傳太郎 外2名 京都蠶事報告第21號 明治44 年 3 月

20日 2 化性 2 化期以形種を用ひ産卵後 2 日日、3 日日、4 日日、5 日日、6 日日に各々 75°F, 80°F, 83°F, 85°F, 87°F, 90°F にて催者したるに噛絲織度は概して 75°F 區最も太く 83°F 區之に次ぎ90°F 區最も細し。又産卵後早期に高温に遭ひたるもの程織度細し。

(45) 秋蠶生種催靑溫度試驗

田邊傳太郎、寶藤久之 京都蠶事報告第21號 明 治44年3月

以形種を用ひ産卵後2日目、3日目、4日目、5日目 6日目に各々70°F,75°F,80°F,85°F,60°Fにて 他青したるに繭絲繊度は概して他青温度高きに從ひ 太き傾向あり。産卵後の日敷による細太の關係は一 定ならず。

(46) 越年蠶種催靑溫度試驗

横田長太郎 外2名 東京盧鸓試驗成績第44號 明 治45年2月

1化性又背及び2化性青熟を用ひ催青温度により60°F,65°F,70°F,75°F,80°F,漸進、急進の7區とせるに繭絲繊度は1化性では80°F區最も太く75°F區、70°F區、急進區之に次ぎ漸進區最も細し。 二化性では75°F區最も太く急進區、80°F區之に次ぎ65°F區、70°F區細し。

(47) 秋蠶種催青中高溫接觸試驗

荒木武雄、三浦英太郎 京都鑑講試驗成績第26號

大正2年3月

(1) 秋蠶黑種俚青中高溫接觸試験

2 化性自龍越年冷談種を7月15日取出し、標準版 (75°F健青)、初日區 (催青初日90°F以後75°F)、 2日日區 (催青2日日90°F以外は75°F)、3日日區、 4日日區、5日日區、6日日區、7日日區、8日日區、 9日日區、10日日區、中2日區、中3日區、後2日區、 後3日區としたるに繭絲織度は概して高温接觸時期 遅きもの程太し。

(2) 秋蠶生種催青中高温接觸試驗

黒種と同様に區分したるに繭絲繊度は他者の前期 又は後期に高温接觸を行へるものは比較的太く中期 のもの細し、2日或は3日接觸の場合も同様なり。

(48) 催품溫度試驗

丸山俊一郎、市村和雄 長野縣松本原蠶種製造 所蠶事報告 第2號 大正11年2月

日1×支11, 歐9×支7, 支8×日106, 厥9×日105を 用ひ他帯温度を60°F, 65°F, 70°F, 75°Fとしたる に繭絲繊度は概して60°F, 65°F原太く70°F, 75°F 騒細き傾向あり。

(49) 春蘧種化 寄温度の高低と誕作及蠶病との関係 試験

高杉宗治 岐阜蠶試報第3號 大正14年5月

(50)秋麓種催靑溫度の高低と蟹作及墓病との關係試驗

高杉宗治 岐阜蠶試報第3號 大正14年5月

支101×日107及日107×支101を用ひ組寄温度により低温區(70°F)、中温區(75°F)、高温區(83°F)とす。繭絲繊度は支101×日107では各區大体等しきも日107×支101では銀青温度高きに從ひ繊度太し。

(51) 秋蠶種の催青中に於ける 無濕の多少と蠶作 の豊凶に關する試驗成績

西川砂 岐阜蠶試報第5報 昭和2年6月

日107×支101及(支4×支101)×大黒黴を用ひ他青 濕度により標準、乾燥、濕潤の3區別としたるに 繭絲繊度は概して乾燥區又は標準區に於て太く濕 潤區に於て細き傾向を示せり。

(52) 秋巍種の催青中に於ける 氣濕の多少及び氣 流の有無と鷲作の豊凶に關する試験成績

四川砂 岐阜蠶試報第6號 昭和3年7月 國富×新江、支101×日107を用ひ催青を無風區、 有風區、乾燥無風區、乾燥有風區、濕潤無風區、濕 有風區の6 區としたるに繭絲纖度は他青中に於ける 氣流の多少有無と一定の關係を認めず。

(53) 催費に關する試驗(春)

徳島縣蠶業試驗場徳島縣蠶試報告5號 昭和4年3月 春、歐7×支7を用ひ溯進法、低温法、稍々低温法、 適温法、高温法の推告をなしたるに繊度は大堂なき が高温推売が稍太い。

秋、支9×日1を用ひ最長期迄80°のもの、後生差90°のものを作りたるに繭絲繊度は後生迄 90°のもの最も細し。

(54) 濕氣の離に及ぼす影響 第2報

松村季美 長野縣蠶試報告10號 昭和5年3月

- 他青濕度60%,75%,90%にてほ蘭絲織度に差なし(信濃吸白×島根2號 正白)
- 2. 1 齢濕度60%. 75%. 90% にては繭絲織度に差 なし(上記と同品種)
- 3. 5 令濕度60%75%にては繭絲織度に差なし 90% に於ては繭絲繊度細くなる。

(55) 鰥卵の催害温度と鰥兒融育關係試験

宮崎縣蠶業試験場宮崎蠶試報告8號昭和8年3月 森は支13×歐3,支18×歐16,夏は那是青×支 4,日11 0×支105を併用し21°C,24°C,27°C,30°Cに催青し普 通に飼育す。繭絲繊度の關係を見るに、春は 21° C 24°Cが太いが夏は30°C太く低温となる程細くなる。

(56) 催害中の乾濕が鍵作に及す影響に就て

原田長太郎、折田敬吉、東博 鹿兒島縣蠶試大鳥支 場報告 第2號 昭和10年3月

試験區は乾燥區、多濕區、對照區に分く、供試蠶品種は茶期は歐18、歐16,支16,夏秋期は日7×支106,支106を用ひ、繊度は春期にては一定の傾向なきも多濕區稍太き場合多し、夏秋期にては乾燥區常に太く多濕區最も細しされどその差極めて少し。

蠶種の(6)人工孵化 (鹽酸孵化法、越冬孵化法、 凄湯孵化法、酸素孵化法、天然温泉浸 清孵化法、電氣孵化法)(合計實験例18)

鹽酸解化法に於て長期冷藏の場合に浸酸冷藏孵化 種は冷藏浸酸冷藏孵化種、冷藏浸酸孵化種等より繭 絲織度細し。尚又普通浸酸孵化種に於ては浸酸温度 及時間により區々であり。又冷藏浸酸孵化種に於て は冷蔵温度、浸酸時間により區々にして一定の傾向 なく、又冷藏浸酸冷藏孵化種に於ては前期冷藏日數 と後期冷藏日數とを種々異にしても何等一定の傾向 も現れず。

尚其他の人工孵化法に於ては實驗例僅少にして繭

絲繊度の細太を認め離し。

(57) 人工越冬鱀試驗

土屋泰、駒宮治作 東鐵講習所蠶事報告第19號 明治36年3月

供試鑑品種は小石丸なり、6月中産卵したものを 普通に保護し越年せしめたるものを甲蔵とし、産卵 後風穴に移して寒冷を感ぜしめ秋期に出穴して發生 せしめたる蠶兒を飼育し之より採卵して乙属となし 附属を比較飼育せり、繊度に於ては乙属は甲属より 添かに大なり。

(58) 漢湯孵化法試驗

荒木政雄、三浦英太郎 京都蠶講試驗成績第25號 明治45年 5 月

小石丸白龍を用ひ小石丸では 120°F 5秒、10秒、130°F 5秒、白龍では 120°F 20秒、130°F 10秒、2秒に分ちたるに蘭絲織度は小石丸では 130°F 5秒 區最も太く120°F 5秒區之に次ぎ。白龍では 130°F 2秒區最も太く同10秒區之に次ぐ。

又自龍の黒種及び之が對照として生種を用ひ浸湯 を120°F 15秒、同20秒、125°F 5秒、同10秒、130°F 3秒としたるに繭絲繊度は黒種では130°F 3秒區最も 太く120°F15秒區之に次ぎ125°F10秒區最も細し。生 種にては120°F區太く125°F5秒區最も細し。

(59) 冷藏種人工孵化種比較試驗

德島縣蠶業試驗場 德島縣蠶試內驗報告第3號 大正13年8月

日1×支101,(支9×支101)×日107,日107×支101 を用ひ冷凝種區と普通授酸種區と冷凝浸酸種區に分けて試験せる場合、繊度は冷藏浸酸種區稍々太く冷凝種區稍々細し。

(60) 冷藏種普通漫酸孵化種、冷藏漫酸種と桑葉硬 軟給與試驗

德島縣蠶業試驗場 德島縣蠶試々驗報告 第3號 大正13年8月。

日1×支101を用ひ冷巌種、普通浸酸孵化種、冷巌浸酸種を各々3分し硬葉給奥區、軟葉給奥區、普通給 奥區として試験せる場合に硬葉區はいづれも太き傾向あり。冷巖種浸酸種との間には一定の傾向なし。

(61) 鹽酸孵化法に於ける 鹽酸刺戟の過不足と孵化 蠶兒との關係試驗

茨城縣第二蠶試 茨城縣第二蠶試試驗成績第3號 大正14年10月

(支101×支4)×日107を用ひ鹽酸温度は116°F118°F120°Fを用ひ浸漬時間は116°Fでは2分、4分、6分8分、11分とし、118°Fでは2分、4分、5分、6分、

8分、10分、120°Fでは2分、3分、4分、5分、7分、9分、10分としたるに削絲維度は液温116°Fにありては2分區最太く、4分區之に運ぎ6分區最も細し。118°Fにありては4分區最も太く10分區、5分區之に運ぎ8分區最も細し。120°Fにありては2分區最も太く10分區、4分區之に運ぎ5分區最も細し。

(62) 冷藏鹽酸孵化法に於ける 冷藏溫度と孵化蠶 兒との關係試驗

茨城縣第二蠶試 茨城縣第二蠶試試驗成績第三號大 E14年10月

(支101×支4)×日107を用ひ冷凝温度を37°F及40°Fとし之を鹽酸浸清時間により3分區、4分區、5分區6分區に分ちたるに蘭絲織度は40°F冷凝のもの稍々太く塩酸浸漬時間37°Fの時は4分區最も太く5分區最も和し。40°Fの時は5分區最太く4分區最細し。

(63) **鑑卵酸薬孵化法に關する試験** 福島縣蠶業試験場 福島縣蠶試報告1號 昭和2年 3 月

酸素接觸保護時の温度との關係にて23°9-35°C迄の間につき試験せるに繭絲織度は 29°C-32°C 位に保護したるもの最も太し。(鑑品種は二化青熟、路積×日107なり)

酸素、空氣、鹽酸孵化蠶兒の何育によりては**幽絲** 繊度に大道なし(蠶品種は目107×支101, B柱×日 107)

(64) 蠶卵の漫酸處理後に於ける 乾燥裝置の差異 が孵化蠶兒に及ぼす影響試驗

岩手縣蠶業試験場 岩手縣蠶試報告10號 昭和 8年 3月

日107×(支101×支4) を用ひ(1)除乾、(2)附予通 過光線乾燥、(3) 直射光線乾燥、(4) 台紙裏面直射 光線乾燥の4 區を作りたり。 繭絲繊度は(1) 區太く (2)(3) 属細く、(4) 區中間なり。

(65) 天然溫泉漫濱による蠶種の人工孵化試驗

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告12號 昭和4 年3月

日107×(支101×支4)を用ひ浸酸、溫揚、溫泉當日浸漬(産卵當日)、溫泉翌日浸漬、冷凝溫泉浸漬をなし人工孵化せるに繭絲織度は溫泉當日浸漬區が著しき太さを示し他は大差なし。

(66) 鹽酸電氣空氣の孵化法が蠶種蠶作繭質等に 及ぼす關係に就て

高杉宗治、坪井禮二 岐阜縣蠶試、第10號、昭和 7年3月

鹽酸、電氣、空氣孵化との關係。

試験區を標準區(鹽酸孵化)、電氣孵化區、空氣孵化區とす、供用品種は浙江×國富(昭和2年秋)、日110號×支103號(昭和3年秋)、日110號×支103號(昭和4年秋及晚秋)、なり。繭絲織度は各蠶期共に電氣孵化區附太く、標準區及び空氣孵化區は稍細き傾向あり。

(67) 長期冷藏鹽酸孵化の方法と蠶との關係試驗

水野保、淺羽登代夫、高野平、飯村重雄 茨城蠶 報第4 昭和8年3月

冷藏浸酸區、浸酸冷藏區、冷藏浸酸冷藏區に3別 せり。 20 個品種は月110×支105。 漸絲繊度は各區間に 殆んど差なく冷藏浸酸區稍々太し。

(68) 鑑卵の人工孵化法に關する試驗

漫酸冷蔵に關する試驗

渡邊孫七、味岡秀夫、羽生貞秋、堀之內綱雄、武 博道 鹿児馬縣蠶業試驗場報告第20號 昭和8年3月 歐17,日110×支105を用ひ浸酸施行の時期により 産卵後3日日午前區、同4日日午前區、同5日日午前 値の3 區に分も更に各々を3分して冷浸區と浸冷區 とにす、浸酸の處理法は鹽酸比重 1.100,液温115° 下,5分~10分間とす繊度は3日目午前區の冷浸區が 最も太し、一般に冷浸區の方繊度太き傾向多し。

(69) 漫酸孵化法に關する試驗

高知蠶試。高知蠶試報第5號 昭和8年5月

(1) 短期冷蔵に關する試験

日110×支105を用ひ前期抑止區、冷凝浸酸區、浸酸冷凝區、冷凝浸酸冷凝區 迫加浸酸區に分ちたるに繭絲繊度は冷凝浸酸冷凝區、追加浸酸法概して太く前期抑止區及浸酸冷凝區は細き傾向あり。

(2) 長期冷藏試驗

情熱×支105 を用ひ冷藏浸酸法、冷藏浸酸冷藏法、 浸酸冷藏法、複式冷藏浸酸法に分ちたるに各孵化法 により明確なる傾向を認め難けれども複式冷凝浸酸 法稍々太き傾向あり。

(70) 冷藏漫酸冷藏に關する試驗

池江郑二 長崎縣蠶業試驗場報告第3號 昭和8年 12月

1. 冷藏浸酸冷藏方法に關する試驗。

冷浸冷法に於て前期冷藏日敷と後期冷藏日敷が飼育及繭質に及す影響を調査す。前期冷藏日敷10日後期冷藏日敷20日のものを第1區とし、前期15日後期15日のものを第2區、前期20日後期10日のものを第3區として試験す鑑品種は支103,日110を用ふ。

繊度は各區大差なく一定の傾向なし。

2. 冷凝浸酸法と冷凝浸酸冷凝法との比較試驗。

- 30日區(冷浸冷(前期冷凝20日後期冷凝10日)
- 40日區(冷浸冷(前期30日後期10日) 冷 浸(前期40日)
- 50日區(冷浸冷(前期30日後期20日)
- 60日區(冷浸冷(前期40日後期20日) 冷 浸(前期60日)
- 70日區(冷漫冷(前期50日後期20日) (冷 浸(前期70日)
- 80日區(冷浸冷(前期60日後期20日)

供試試品種は支103,日110なり 繊度は冷浸冷區常に冷漫區より太きもその差顯著な らず。

(71) | 翻種の電氣孵化に關する試驗

池江鄉二 長崎縣蠶業試驗場報告 第 2號 昭和 8 年12月

1. 飼育及繭質に關する調査

1) 普通放電に關する試験

日110×支103を用ふ産卵後失々異なりたる時期に 放電處理せる場合に之が何育及離質に及す影響を調 査す。12時間區(産卵後12時間目放電)36時間區(同 36時間目放電)60時間區(同60時間日放電)の3 區 を設け40ミリアンペアの電流を30分處理す、繊度は 36時間區太く12時間區和き傾向あるものの如し。

2) 冷蔵放電に關する試験

冷滅放電をなす場合其の冷談の時期如何が何宵、 繭質に及す影響を調査す。支103×日110を用ひ産卵 後所定の時期に冷談し80日日に用庫し、2時間後放 電處理す、試験區は遊卵後20時間日入庫區、同36時間 間目入庫區、同60時間日入庫區、同80時間日入庫區 の 4 区に分つ。機度は36時間日區最も太く60時間日 區80時間日区の順に細く20時間日區最も和し然しそれ等の発顯著ならず。

3) 冷藏放電冷藏に關する試験

前期冷藏日數と後期冷藏日數との長短の關係が何 育及繭質上に及す影響を調査す支103×目110を用ひ 產卵後40時間目に冷藏し所定時期に田庫し2時間後 放電し更に2時間後再び入扉冷藏し所定時期に田庫 せり。試驗區は1區(前期冷藏日數10日後期冷藏日 數20日)、2區(同上15日同上15日)、3區(同上20日 同上10日)とに分けたり織変は3區は最も細く2區 或は1區太きも一區の方太き傾向あり。

4. 冷藏放電種と冷藏放電冷遠種との比較試驗 支103、日110を用ひて冷電區と冷電冷區の二區を 設けて試験す、纖度は常に冷電區の方太し、されど その差顯著ならず。

- 5. 電氣孵化種と浸酸孵化種との比較試驗。
- a. 冷藏放電種と冷藏浸酸種との比胶

支103, 目110を用ひ冷藏浸酸師と冷藏放電區とを 設けて試験す。冷藏放電法は上記の方法と同一であ り、浸酸法は塩酸比重1.090,液温117°F,4分浸渍 を行ふ機度は冷藏放電區常に太きもその 差顯著な らず。

b. 冷凝放電冷凝種と冷凝浸酸冷凝種との比較。 冷凝放電冷凝法は上記 3) の場合と同じなり、冷 凝浸酸冷凝法は放電の代りに浸酸(比重 1.10,冷17° F,4分間)をし20時間後冷凝し10日目に出庫す。織 度は浸酸區の方放電區より太き傾向あるも顯著なら ず。

(72)冷藏鹽酸孵化額と鹽酸孵化冷藏團との比較試驗 池江郷二 長崎縣蠶業試験場報告第3號 昭和10 年8月

日110×支105を用ひ冷浸20日底、冷浸30日底、浸冷22日底浸冷32日底の4底に分ちて試験せり試験結果中繊度に關しては浸冷底は冷浸底より稍々太し。(73) 冷藏壁酸孵化種に關する試験

池江輝二 長崎試驗報 3 號 昭和 10年 8月

塩酸の比重並に液温の同一なる場合に其の浸漬時 間の長短による孵化の良否が何育及收繭に如何に影 響するやを比較調査せり。

國鑑支 105 號を用ひ短時間浸酸孵化良區(浸漬時間 1分)同孵化不良區(同 1分)長時間浸酸孵化良區(浸漬時間 8分)向孵化不良區(同 8分)適當なる浸酸孵化良區(浸漬時間 4分)の 5 區に分ちて初秋及晚秋の 2 回試験せりその結果の繊度に關しては各區大差なけれども短時間浸酸孵化不良區稍々太く適當時間浸酸孵化良區最も細し。

蠶種の(7)其他(蠶種關係の雜多の試驗)(實驗例18)

(74) 卵殼硬軟試驗

辻暢太郎、橋爪秀太郎 東鑑講習所蠶事報告第21 號 明治37年3月

供試鑑卵は発鑑小石丸にして殻質硬度計により卵 数の硬軟を檢し硬、中、軟の3個に分ち之を飼育試験 したるに繊度に於ては軟風最も太く中區最も細し。 (75) 不越年麗種洗滌試驗

坪井啓作、武政吉 東鑑講習所鑑事報告 第21號 明治37年3月

夏蠶新屋を用ひ産卵後3日目甲區(浸水5分間)同 乙属(10分間)6日目甲區、同乙區、9日目甲區、同 乙區、標準區(無浸水)に分ちて試験せるに繊度に 於ては6月目甲區最も太く3月目甲區之に次ぎ9日 目乙區特に細し、而して9月目乙區以外はいづれも 標準區より太し。

(76) 不越年顯卵色運試驗

土屋泰 外3名 東京蠶事報告第38號 明治42年2月 二化性新屋種の第一化期不越年種をとり零常に保 して無色なる卵を無色區とし際鼠色なるを有色區 とし。更に日隣及び日常に保護し紅色となれると否 とにより有色無色兩區に分も計六區とせるに繭絲織 度は日射區と日蔭區は零常保護のものより太く有色 系統は無色系統より稍々太し。

(77) 生種の冷藏試験

横田長太郎、富樫健 東京蠶事報告第40號 明治 43年3月

電品種は日本錦を用ひ産卵より他背に至る間毎日0°C,5°C,10°C に冷藏する事各10日、20日、30日とせるに繭絲織度は冷蔵日敷長きに從ひ細くなり7日目冷藏のものは特に細く、10°C區に於て特に著し。

(78) 春蠶種催青中發育抑制試驗

売水武雄 外2名 京都鑑譜試驗成額第26號 大正 2年3月

(1) 小石丸種を用ひ試験域は

標:準 區 普通の方法により催暑

冷箱5日 催特許手後10日を報て 37°Fに5日間抑 側

冷箱10日 健青溶手より10日間抑制

土籍5日 健青治手10日後50°F に5日間抑制

土等10日 催青着手より10日間抑制

繭絲織度は冷藏5日區最も太く土窪10日區之に次 ぎ土窖5日區最も細し。

(2) 小石丸種を用ひ 4月中旬貯藏器より取出し他 市斉手より10日日、12日目に40°Fの冷箱及び55°Fの 土寝に 5, 10, 15日間蠶種を抑制せるに繭絲織度は 冷箱にては15日甌太く10日區細く土窖にては5日區 太く10日區細く10日目、12日目雨區は差なし。

(79) 秋蠶種催靑中浸水試驗

荒木武雄、三浦英太郎 京都蠶講試驗成績第25號 大正2年8月

(1) 秋蠶黑種催青中浸水試驗

(2) 蠶種生種催青中浸水試驗

黒種と同様に區分したるに崩絲繊度は標準區最も 太く1回給水區之に次ぎ發生前給水區最も細し。

(80) 生種一代雑種と在來種との冷藏抵抗力比較 試驗

田中福雄、大石久雄 長野縣松本原蠶種製造所蠶 事報告第2號 大正11年2月

日105, 日106, 日106×変8及び日105×戦9を用ひ無冷凝、10日間冷凝、20日間冷凝、30日間冷凝、40日間冷凝、50日間冷凝の6 區としたるに繭絲織度は無冷凝、10日間冷凝、20日間冷凝の間には大差なくて太く30日間冷凝區は之等より細く四十日間冷凝區最も細し。

(81) 雄蛾交尾回數試驗

茨城縣第二鑑試 茨城縣第二鑑試試驗成績第1號 大正14年10月

一鑑品種は支4,日1を用ひ交尾回敷を1回より8回迄 に分ちて試験せるに交尾回敷と次代鑑の謝絲繊度と の間には一定の關係なし(但し茶鑑期飼育)。

(82) 驪卵の比重と糶との關係試驗

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告10號 昭和3 年3月

日107×(支101×支4) を用ひ比重を三級に分けたる鑑を飼育したるに繭絲織度は大差ないが中間比重のもの幾分太い傾あり。

(報告12號(昭和4年3月)にて歐7×支7,日1× 支4にても殆ど同様の結果を示す。)

(83) 鰡卵り重と鰓兒との關係試験

福島縣鐵業試驗場 福島縣蠶試報告2號 昭和4年 3月

日1,支4, 駅7×支7,日1×支4,日107×(支101× 支4)日109×支102等を用ひ卵の比重を3又4階段に 分ち飼育したるに繭絲織度には一定の傾向を見ず。

(84) 笹色繭の製絲に及ぼす影響

愛知縣蠶業試驗場 愛知蠶試試驗報告2號 昭和 5年3月

日107×新白、日107×支101, 青熟×浙江、紹興 ×大白龍等の蠶品種にて試験せるに笹色の濃淡によ り繭絲織度に差異を認めず。

(85) 加熱鹽酸中に混入せる 水銀が蠶卵蠶兒に及ぼ す關係試驗

阿崎 信 愛媛縣蠶試報告 第23號 昭和6年8月 日110號×支103號 日107號×支4號 試験區を水 銀混入區 (比重1.1の塩酸1500c.c中水銀6g 混入) 水 銀除去區 (鹽酸1500c.c 中に水銀6gを混入し5分間放 置せる後水銀を除去す)、標準區の3 區とす、繭絲維 度は水銀混入區に於て機分太き傾向ありo

(86) 秋郷種の催寄場所に關する試験

日107×支4,(支4×支101)×日107を用ひ他青場所を異にし林間區、構穴區、燈道區、非戸區、自然區、調節區の6區に分けたる場合に機度は各區とも大差なきも林間區最も太く自然區之に次ぎ調節區最も細し。

(S7) 散卵種の膠鶯防止方法に就いて

(88) 蠶種交換飼育調査成績

中田太郎 福岡蠶試漿報第5號 昭和9年3月

日1,支4,日1×支4を用ひ一は熊居場採種のもの を熊居場及顧岡にて、一は顧岡採種のものを顧岡及 熊居場にて侗育したるに繭絲織度は何れの場合も顧 岡飼育の方太し。

(89) セロフアン紙使用と催寄との關係試驗

味岡秀夫、道岡祐友 鹿兒島縣蠶業試驗場報告 第21號 昭和9年3月

支106, 日7, 日110を用ひ低溫 (18.95C) 個背區、高溫 (25°C) 個背區、高溫光線區に分け更に之等を各々 3分してセロフアン紙俚背區、ハトロン紙俚背區となせり、セロフアン紙個背區は室の外間の戸障子を全部開放し健青器の四周及天非を無色セロフアン紙にて服り 健青せるものなりハトロン紙健背區も之に 準ず、試驗成績中執度に關してはセロフアン紙區は一般に裁度稍々細き場合多し。

(90) 催膏中の靈卵に對する 鹽酸の刺戟が孵化並 離兒の發育に及す影響試驗

味岡秀夫、道岡祐友 鹿克島縣蠶業試驗場報告 第21號 昭和9年3月

支106×歐18,支106を用ひ他青治手常時或は他青中の各期に鹽酸の刺戟を與へ孵化後に於ける各種の成績を調査す繊度に關しては各國の差僅少にして用。つ一定の傾向なし。

(91) 不授精卵に關する試驗

池江湖二、長崎鴛報第3號 昭和10年8月

不授精卵の多數混合せる機區と然らざる帳區の蠶 卵とが飼育及收繭上に及す影響に就いて比較調査す 供試品種は國蠶支106號にして供試頭數は各々300頭 なり初秋晩秋の2回施行す試験成績中繊度に關して は初秋期は良卵區は不受精卵區より稍々太きも晩秋 期は不受精卵區の方太し然れども共の差極めて僅少 にして殆ど差なしと云ふを得べし。

蠶種の(8)蠶蝿蠶蛾の冷蔵 (實験例蠶蛹2,蠶蛾2)

實験例僅少にして言明困難なるも蠶蛹冷嚴に於て は高温卑護は繭絲織度は太く、濕潤保護低温保護は 太く冷礙日數の如何は差異なきものの如し。倘又輓 の冷藏に於ては繭絲織度に大差なきものの如きも冷 蔵温度高きに從ひ太くなる場合あり。

(9) 種繭保筆試験

横田長太郎、外二名 東蠶講習所蠶事報告 第19 號 明治36年3月

類期間を乾燥風、濕潤風、高温區、低温風に分け 保護せる場合に高温風散も太く低温風之に衣ぎ濕潤 風散も細し、面して最太と最細との並は顯著なり。 本試験に用ひし蠶品種は二化性新屋種なり。

(93) 種酶冷藏試驗

洗木武雄、三浦英太郎 京都鑑譜試驗成績第25號 明治45年5月

小石丸を用ひ程繭貯蔵温度を 40°F とし 10日、15日、20日間貯蔵したるに繭絲繊度は10日貯蔵區細く他は大差なし。矢の羽を 用ひ40,45,50,60°Fに5日及10日貯蔵したるに繭絲繊度は10日貯蔵區却つて稍々太く温度は45°F區、50°F區太し。

(94) 製種に供する戦の冷藏試験

荒木武雄、三浦英太郎 京都蠶髒試驗成績 第25 號 明治45年5月

鑑品種は大草、白龍を用ひ鯱の冷凝温度を 40°F 45°F, 50°F としたるに繭絲繊度は冷凝温度高きに 從ひ太き傾向あり。

(95) 蠶蛾の冷藏試驗

茨城縣第二蠶試 茨城縣第二蠶試試驗成績第 1 號 大正14年10月

鑑品種は日4,支8, 阪7を川ひ蛾の冷凝温度により40°5F,45°F,52°F,56°F,63°Fの5個及び38°F,45°F,51°F,56°F,59°Fの5個に分ち更に各温度に付3日,6日,9日冷凝と3分したるに繭絲繊度は各區一様ならざるも冷凝温度及び期間による差異は一定の傾向を認めず。(条鑑期飼育)

Ⅲ 飼育關係部門

掃立時期の遅き場合は早き場合より繊度細し。

(96) 春鑑擇立の早晩と蠶兒、繭、卵との關係試験 患清南道原蠶種製造所 患清南道原蠶種製造所報 告第3號 昭和9年3月

日1×支4を用び5月1日標、5月5日標、5月15日標、 5月25日標、6月5日標の5属に分ちたるに繭絲繊度 は掃立時期の遅れるに從ひ細くなる。

(97) 春蠶爆立時期の早晩が育蠶採種垃集樹の競 育に及ぼす影響調査

歐7×支7外8品種を用ひ卓様、中様、晩婦と3區別 としたるに謝絲銭度は概して掃立時期早き程太し。

(98) 春**蠶博立時期の早晩が養蠶經濟に及ぼす影響** 長野縣諡業試驗場 長野蠶試彙報36號 昭和11年 3 月

職9×正白、歐18×支106、支106×歐18にて試験 せるに早掃は晩掃より繭絲織度太き場合多く例敷少 なけれ共常しき場合あり。早掃が晩掃より繭絲織度 細くなることなし。

尚非蠶用桑品種の瀬絲織度に及ぼす影響を見るに 掃立時期晩くなる程瀬絲を細くするは鼠辺、改良鼠 返、四方咲等にして鳥ノ内は晩掃とするも瀬絲繊度 を細くする事少し。其の他(368)

飼育の(2)飼育温濕度及氣流(資験例27)

飼育温度に於ては稚蠶期は稍々高温壯蠶期は稍々 低温金齡を通じては 75°F附近が太し。

飼育濕度は稚蠶期は稍々多濕非蠶期は75%附近全 齢を通じては75%附近又は稍々乾燥の時太し。倘又 氣流とは關係なきか又は有氣流の時稍々太上。

(99) 飼育溫度を異にせる蟹兒の强弱試験

土屋泰、駒宮治作 東京蠶事報告第19號 明治36 年3月

試験區を甲1屆(前年來標準育本年高溫育)乙1 區(前年來天然温度育本年高溫育)甲2區(前年來 標準育本年天然温度育)乙2區(前年來天然温度育 本年も同樣)に分け小石丸を以て飼育せるに繊度に ては乙1區、甲1區太く乙2區最も創し。

(¹⁰⁰)外界の障害に對する生種一代雑種の抵抗力 試験

田中福男、大石久男 長野縣松本原蠶種製造所蠶 事報告第2號 大正11年2月

(1) 障害の種類と蠶兒の抵抗力との關係試験 日105, 日106×支8, 日105×アスコリピチェノを 用ひ夏期に於て各齢期に예食3回後及盛食期の2回

次の障害に遭遇せしめた。即ち標準區、高温多濕、 高溫乾燥、低溫多濕、高溫乾燥低溫多濕、絕食、高 温乾燥絕食、不良黍給與の8属とした。繭絲繊度は 標準區最も太く高温乾燥區之に次ぎ高温乾燥絕食區 最も細しっ

(2) 障害の時期と蠶兒抵抗力との關係試験

- 夏蠶期 日106×支8を用ひ標準區の外障害時期を 起蠶、餉食期、盛食期、眠蠶期に分ちその各々を高温 乾燥、高温多濕、低温多濕、絕食の4區に分つた。繭 **締織度は障害區は標準區に比し概して細き傾向あす** 高温乾燥 區に て は眠期の もの最も太く起蠶最も細 し高温多濕區にては起蠶、餉食蠶兩期のもの太し。 低温多濕區にては眠期のもの最も太く起蠶期のもの 最も細し。絶食期區にては起蠶期のもの最も細し。

(101) 温度の謎に及ぼす影響に就て

松村季美 長野縣蠶業試驗場報告 9 號 昭和4年3月 日1, 支4, 歐9等を用ひ20°24°28°Cに試験せる に繭絲繊度は

健審期には24°C太く20°C 之に次ぎ28°C 細し。 1齢飼育には温度高き程太くなる。

5齢飼育には温度高き程細くなる。

(102) 原體飼育温度の高低が飼育成績繭質並に次代 鍵に及ぼす影響に就て

松永實 石川蠶試報第4號 昭和5年3月 鑑品種は日1,支4を用ひ容鑑期飼育とす。昭和3年 には22.8°C (低温) 26.7°C (高温)、自然温度の3區 とし、昭和4年には第1區 (全齢22.8°C) 第2區(稚 3 26.7°C 升置 22.8°C) 第 3 區 (稚蠶22.8°C 升蠶26. 7°C) 第4區(雅麗自然壯蠶22.8°C) 第5區(雅蠶 22.8°C <u>組織自然</u>) としたるに<u></u>
南絲繊度は昭和3年に は稚蠶飼育は高温區最も太く他二者は細し。非蠶飼 育では 高温區最も太く 低温區之に 次ぎ 自然温度區 最も細し。昭和4年には第1區最も太く第5區之に 次ぎ第3、第4區細し。

(103) 蠶兒飼育竝に上羰時に於ける旋風機の應用に 就て

山形縣蠶試 山形蠶試染報第5號 昭和5年4月

(1) 秋鑑の飼育中に於ける旋風機應用試験

第1區 旋風機を使用せず

第2區 123 齡間旋風機使用

第3屆 45 齡間旋風機使用

第4區 全齡旋風機使用

支103×日110を用ひたるに繭絲繊度は第2區最も 太く第3區之に次ぎ第1區細し。

(2) 晩秋蠶の飼育中に於ける旋風機應用試驗

第1區 全船每給桑前30分旋風機使用

第2區 123 齡期中同上

第3區 45 齡中同上

雅一

第4區 金輪夜間給桑時のみ同上

第5區 旋風機を使用せず

歐3×支103を用ひたるに繭絲織度は第5 區最も太 く第3屆之に次ぎ第2區最も細し。

(104) 秋期飼資法試驗

廣島縣蠶試庄原支場 廣島蠶試庄原支場強報 昭 和6年3月

對照區の外常温換氣區と常溫無換氣區とし各々を 乾燥區と濕潤區に分ち更にそれを硬薬區と脓薬區に 分ちたるに繭絲織度は對照區、常温換氣乾燥軟業區 常温無換氣乾燥硬葉區太く常温換氣濕門硬葉區最も 細し。

(105) 氣流の有無及び溫濕度の高低が蠶兒發育に 及ぼす關係試驗

靜岡縣蠶業試驗場 静岡蠶績第19 昭和6年8月

供試諡品種は日 107×浙江とし、有気流と無気流 とを乾燥、濕潤及び蠶兒發育時期と組合せ常温時及 び高温時に分ちて試験せり。繭絲繊度は濕潤區は乾 燥區より太く有氣流區は無氣流區より概して太し。

(106) 氣流試験

德島縣蠶業試驗場 德島縣蠶試報告6號 昭和6年

日1×支101を用ひ、密閉室にアドソール乾燥器を 使用區、同扇風器使用區、對照區を設けたり。繭絲 繊度は扇風器區積々細きも大差なし。

(107) 蠶兒の飼育上に及ばす氣流の影響

高瀬信孝他2名 愛知縣蠶試試驗報告4號 昭和7

支101×日107に就き試験せるに無気流、0.6秒米、 0.9秒米、1秒米にては繭絲繊度に差を見ざるが1.3 秒米乃至1.7秒米等になれば繭絲繊度細くなる。

(108) 飼育温度と桑葉の硬軟が蠶体水分並に飼育 成績に及ぼす影響

蠶絲界報486 昭和7年8月 廣島蠶試彙第2號 昭和6年3月

| 濕潤區 (80-85%)|| 乾燥區 (70-75%)|| 標準區の 3區とし濕潤、 乾燥の雨區を更に軟葉給與區、硬葉 給與區に分けた。廟絲纖度は濕潤軟葉區最も太く、 乾燥硬葉區最も細し。

(109) 春蠶稚蠶期に於ける濕氣の多少と給桑回數 との關係に就て

宇都宮福一、城戶多喜男 要處縣蠶試報告 第23 號 昭和6年3月

供試鑑品種目1號×支4號 試驗區は1齡間のみ乾燥 裝置內にて2時間华海、3時間华海、5時間每、8時間毎 に一回給祭して飼育し2齡以後普通蠶室に於て飼育 するもの1齡間のみ多熟裝置內にて2時間华海、3時 間华海、5時間毎、8時間毎に一回給桑し2齡以後普 通蠶室にて飼育するもの荷之と同様に2齡間のみ試 驗裝置(乾燥裝置及多濕裝置)內に移したるもの、 3齡間のみ試驗裝置內に移したるもの及 1.2.3齡間 試驗裝置內に置きたるもの等の各區を設く、繭絲織 度は各區間大差なく細太に一定の傾向を認め雖し。 (110) 五鱗期の飼育と繭質との關係試験

大分類試 大分類試事績報告第14號 昭和6年11月 24°C以上、21°C以上、18°C以上、金條育、上华 區、下学區の6回とし繭絲織度は21°C以上區及上华 區太く21°C以上區及下半區細し。

(111) 繭絲の繊度に關する試驗

離谷線、山口一雄 神奈川္武報第2 昭和7年3月 標準、4齢低温、5 齢低温、4 齢板薬、5 齢枚薬、 5 齢前半硬薬後半秋薬の6 属とす。添には支14×隊 17を用ひ何育温度は4齢は4齢低温属のみ16.1°C 他は21.8°C5 齢は5 齢低温属のみ18.2°C他は21.7° C。初秋には相撲×支105を用ひ何育温度は4齢は4 齢低温属のみ25.9°C 他は26.5°C。5 齢は5 齢低温 属のみ18.8°C 他は26.4°C。

繭絲織度は発は4 静軟葉區最も太く4 静硬葉區最も細し。初秋は4 静硬葉區最も太く5 静低温區最も細し。

(112) 稚蠶期に於ける飼育濕度と用桑の飼料價値が 蠶作に及ぼす影響に關する研究

佐藤貞治 埼玉蠶報第2〕 昭和7年3月

供試桑品種を多制早生、改良風返、改良餐桑とし各々を硬葉、中葉及軟薬に分ち、温度90% 75% 60%に就き茶、初秋及晚秋の3期に稚鑑期に試験せり。繭絲繊度は稚鑑温度60%は90%及75%に比し繊度細く、各濕度を通じて中葉に於ては繊度太き傾向あり又改良魯桑に比し改良風返多胡早生は繊度太き傾向あるも各品種の軟薬は硬薬及中薬に比し品種間の差異少き場合多し。鑑期別に見るに添蠶期は初秋 鑑期及晚秋蠶期に比し繊度太き傾向あり。

(113) 蠶兒の飼育溫度と用桑の飼料的價値が蠶作に 及ぼす影響に關する研究

佐藤貞治 埼玉蠶試報第22號 昭和8年8月 飼育温度を29.5°C (高温) 23.9°C (中温) 18.3°C (低温) に分類し各區を硬葉、中葉、軟葉の3區とな し春蠶及び秋蠶に稚蠶期及び肚蠶期に分ちて試験せ り。繭絲織度は稚蠶期に倒育温度黍の熟度を虁へたものでは高温育最も太く低温育最も細し又各區中、中築給與區は他より太き傾向あり又壯蠶期に温度、桑の熟度を虁へたものでは中温育區及び各區中の中 発給與區は概して太き傾向あり。

(114) 飼育温濕度の繭解舒に及ぼす影響

岩村和側外 5名 愛知縣蠶試試驗報告 5號 昭和8 年 3 月

目107×支101を用ひて試験す。 繭絲繊度は

- 1. 稚蠶期及び全齢期を高温に何育すれば低温に何 育せるものより太し。
- 2. 非鑑期を高温に飼育せるものは同期を低温に飼育せるものに比し細し。
- 3. 稚蠶期、韭蠶期、全齢期を多濕に飼育せるもの は乾燥に飼育せるものに比し太き場合多し。
- 4. 稚蠶期、壯蠶期、金齢期を多濕中に飼育せるものは繊度最も太き場合あり。
- 5. 高温上族は低温上族に比し太し。又濕潤上族は 乾燥上族に比し太し。

家就の飼育温度濕度並氣流に關する試驗

华込正一 群馬縣蠶業試驗場報告第18號 昭和8 年11月

1. 温度に闘する調査成績

鑑品種は目1,支4,除7,目110,支102,目1×支4,支7×除7,目110×支102を用ひ全齢、稚蠶、非 鑑に分け更に各属を4分して濕度60%區、70%底、80%底、90%底となせり。温度は脊期は68°F,秋期は78°Fとなせり。試験成績中繊度について見るに稚蠶属、非蠶區、全齢底を通じて濕度60%或は70%のものは織度太く、多濕狀態に飼育せるものは細き傾向あり。

2. 温度に開する調査成績

鑑品種は日1,支4,支7, 阪7, 日110,支102,日1×支4,支7×欧7,日110×支102,を用ひ会齢68°F同73°F,同78°F,同83°F,稚鑑68°F,組鑑78°F,相鑑78°F,組織78°F,稚鑑78°F,稚鑑73°F。 83°F、肚蠶63°F,稚蠶73°F。 別量83°F,稚蠶83°F,稚蠶83°F,稚蠶73°F。 の8庫に分つ湯度は何れも75%とす成績中繊度について見るに全齢 73°F 値は最も繊度太く他は一定の傾向なしされども一般に作柄の如何に影響され 其の不良なる 場合には 繊度細き 傾向あり。

3. 温度並濕度に關する調査成績

温度は68°F, 73°F, 78°F, 83°F, 温度は60%, 70%, 80%, 90%とし夫等を五に組合せて温度温度を異にせる室内に於て諡兒を全齡を通じて或は稚蠶

胆蠶を交互に入れ替へて飼育せり、蠶品種は支13×歐16,日110×支102を用ひ春、秋、晩秋の3回行へり成績中識度に就いて見るに78°F70% 或は83°F60%にて飼育せるものは繊度太き傾向あり、而して肚蠶期を低温にて飼育せるものは細き傾向あり。尚肚蠶を高温稚蠶を低温にて飼育し作柄不良なる場合には細き傾向あり。

4. 叙述に關する調査成績

歐16×支13, 日110×支105を用ひ温度並に温度を 異にせる場合に氣流の多少の繊度に及す影響を見る に繊度と氣流との關係は一定の傾向見えず。

(116) 五齢期に於ける飼育條件の繭質絲質に及す 影響

松村拳美、酒井文三郎、金崎真英 長野縣蠶業試 驗場報告第29號 昭和9年12月

1. 飼育温度の高低

温度を 21.1°C~30°C まで種々に分けて試験の結果繊度に關しては温度の上昇に伴ひ衝次細し。

2. 飼育温度の多少

60%區、77%區、94%區の3 區を設く 繊度は濕度の増加に伴ひ漸次細し

3. 桑品種の良否

島ノ内區、鼠返區、改良鼠返區、扶桑丸區の四區 を設く

織度に關しては島ノ内區最も太く扶桑丸區、鼠返 属之に次ぎ改良鼠返區和々細し

4. 用桑の硬軟

硬葉區、中葉區、軟葉區の3 區を設く繊度に關して は軟葉區稍々太く中葉區之に次ぎ硬葉區最も細し

5. 給桑鼠の多少

標準量給聚區、5 割減量給聚區の2 區を酸く纖度 に關しては5割減量區は標準區より細し

6. 鑑座面積の廣狭

・標準區 (5 齢尺坪頭數100頭)、厚侗區(同130頭) - 薄侗區(同70頭)の3 區を散く、繊度に關しては蠶 - 座面積廣きに從ひ太し。

因に蠶品種は彩期は支105號×歐16號、支105×歐 18號、夏期、秋期は日110號×支105號を用ひた。

(117) トタン箱飼に關する試験

第二報 飼育温度との關係

金崎眞英 長蠶彙報 34號 昭和10年4月 春蠶は20度、24.4度、28.9度にて試験し。夏秋蠶は 250-270-28.9°Cにて試験し繭絲繊度は温度の 上昇に伴ひ太くなる。但し秋蠶は傾向明かならず。 (供試品種春は支14×歐16,支106,歐18,夏秋は日7 ×支106、目110×支106、平和×安泰なり。)

(118) 稚鑑期飼育濕度の壯麗飼育並に其の成繭に 及す影響

高瀨信孝 愛知縣蠶業試驗場彙報第2號 昭和11 年3月

全飼育中温度は26.7°C (80°F) に一定し稚觀期を 濕度90%區、80%區、60%區の3 區に分けて飼育し 四齢飼食と同時に各區を3分して各室の蠶兒を交換 して計9 區を設けて飼育す。

供試器品種は目107×支101にして春、秋、晩秋の3期を何育す、試驗成績中機度について見るに稚蠶期を態度90%に何育したものは肚蠶期を90%に保護したものに比して機度は太く稚蠶期を60%に何育したものは肚蠶期60%のものより機度が細い尚稚蠶期80%のものとの間には著しい相異はない、而して稚蠶多濕肚蠶乾燥は稚蠶乾燥肚蠶多濕より裁度太く稚蠶多濕肚蠶多濕は稚蠶多濕肚蠶

(119) 飼育環境が繭絲織座並に收繭成績に及す影 響に就いて

味岡秀夫、十萬五良 試絲學報第18卷第5號 昭和11年5月

イ、稚蠶 (一、二齡) 飼育温度及飼育型式との關係 初秋蠶期は結飼27°C属、結飼30°C属、結飼濕布 27.5°C属、結飼濕布30°C属、對照27.5°C區、對 照30°C属の6属を設け・地秋蠶期は各型式共更に25° Cの1属を粉設す、繊度に關しては各属間に一定 の傾向なし、初秋蠶に於ては高温育は低温育より 太し。

ロ、5齢期に於ける給桑貴及薬質との關係

軟薬區、中薬區、硬葉區とに分け更に各々を適量 區、減量區、回滅區の3區に分ちて試験せり、繊 度に關しては初秋期は適量區最も太く、減量區稍 々細き傾向あり、晚秋期は減量區最も太し、され ど3者の差著しからず又硬葉區最も細く中葉區或 は軟葉區太し。

ハ、五齢期に於ける蠶座面積の廣侠及給桑量との關 係

試験區を標準區、厚侗區、湖甸區、厚侗少量區、 湖甸多量區に分けたり、繊度に開して海甸をなし 給桑量を増すときは繊度太くなる傾向あり標準區 最も繊度細し。

ニ、上族時期との關係

盛食期上淡區、成長極點上淡區、成熟期上淡區、過 熟期上淡區の4個を設く、繊度に就いて見るに過 熟鑑を上族せしむるときは繊度太く未熟鑑上族は 繊度細しo

ホ、5 齢期に於ける飼育要素との關係

第1 區、第2 區、第3 區に分ち第1 區は中華、適 量、尺坪80頭にて何育し成熟期に上凝し、第2 區 は硬葉、5 割減、尺坪110 頭にて何宵し盛食期上 渡とし第3 區は軟業、4 割増、尺坪50頭にて何ひ 過熟期上渡となし比較調査せりその結果繊度につ いて見るに第2 區繊度最も細く第1 區或は第3 區 最も太し。

因に以上の試験に用いし鑑品種は目111×支107にし て初秋、晩秋の2回行へり。

玤 他

(261), (271), (275) (290), (414), (22)

飼育の(3)飼育型式 [

(濕布育、縮何、乾布育、密閉育、撒土育、活葉育 地下室育、覆蓋育、障子育、調氣育、地中育、安全 育、水盤育、石燈育、活條育、高級育、開放育、合 計、實驗例57)

滋布育は對照區より繭絲織度細き傾向あり。此の傾向は茶よりも晩秋に著し。稚蠶濕布育は肚蠶濕布育より常溫濕布育は高溫濕布育より繭絲織度何れも太き傾向あり。

箱飼に於ては木箱、ダンボール箱共に劉照属より 細き傾向あり。 称は秋よりその傾向者し。 尚木箱は ダンボール箱よりも稍々太き傾向あり。

乾布育、密閉育其の他は實験例少きを以て一定の 傾向を求め難し。

(120) 春蠶及夏蠶試育法試驗 滋賀縣蠶業試驗場 滋賀縣蠶試事績報告第12號 大正12年

- 1. 稚蠶何育法との關係、日1號×支4號 浴蠶期、 標準育、濕布育、多濕育、高溫多濕育、高溫濕布 育、の5 區を設け試驗せるに、繭絲織度は多濕育 區及び高溫多濕育區太く、標準育、濕布育、之に 次ぎ高溫濕布育船細し
- 2. 鑑種の處理との關係、(日107號×支101號×支9) 號 夏馥稚鑑期を標準育、濕布育、多濕育の3區 に分ち各區を浸湯種區 (F125度の温湯中に 5分間 浸漬)、浸酸種區 (F115度、比重1.075の鹽酸中5分 間浸漬)、風穴種區、生種區の4區となし試驗せり 北蠶期普通育とす、繭絲繳度は各區とも、風穴種 太く、生種之に次ぎ浸酸種と浸湯種とは略同様な

(121) 春蠶箱育及濕布育に關する試驗

德島縣蠶業試驗場 德島蠶試報告 4號 大正15年

3H

支7×歐7を用ひ、標準區、濕布育2回給桑區、瀑布育3回給桑區、結何3回給桑區、統何3回給桑區、統何3回給桑區、統何3回給桑區と作りたるに臨絲織度には大達なし。

(122) 秋鸑濕布資箱飼に關する試驗

德島縣蠶業試驗場 德島縣蠶試報告 4號 大正15 年3月

- 1. 支9×日107を用ひ、濕布育、建液濕布4回給業、 高温乾燥時濕布5回給業の8區を設けたるに幽絲織 度は大差なし。
- 2. 支9×日107を用ひ箱飼、箱飼4回給桑、箱飼5回 給業の属を設けたるに繭絲繊度は箱飼普通匯最も 細く、箱飼5回給発區最も太し。

(同場報告 5號(昭和4年3月)にて支9×日107を 用ひ金く同様の傾向を得たり。)

(123) 和耀式稚耀室飼育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告 8號 大 正15年3月

支4×日1を用ひ對照区、和式蠶室蠶箔育、和式蠶 室函飼育となしたり。繭絲繊度は和式蠶室函飼育が 太い。

(124) 函酮育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山蠶試報告8號 大正 15年3月

支4×日1を用ひ木箱、ダンボール箱にてその開閉 により種々なる區を設けたり。繭絲織度は常に蓋を 開けない區が太い傾向なり。

(125) 濕布育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告8號 大 正15年3月

支4×日1を用ひ普通育、常温濕布育、高温濕布育 としたり。繭絲繊度は常温濕布育稍々太い。

(126) 濕布程度試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶武報告8號 大 正15年3月

支9×青熟を用ひ標準濕布育、稚蠶始終濕布育、 全齡始終濕布育としたり。 繭絲繊度は金齡始終濕布 育細し。

(127) 稚蠶飼育法試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告8號 大 正15年3月

(128) 稚蘿飼育法試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告8號 大

正15年3月

秋期に支9×青熟を用ひ普通鑑箔育、函側育、濕 布育をなしたり。繭絲繊度は普通鑑箔育が太い。

(129) 一化性全齢函飼育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告8號 大 正15年3月

(130) 函飼育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告8號 大 正15年3月

支9×青熟を用ひ標準兩何育、稚蠶始終閉蓋、金 齢始終閉蓋となす。繭絲織度は標準兩何育が太し。

(131) 普通宵と箱育及綿布育との比較試驗

升森京之助、武游敏一 岐阜蠶試報第4號 大正 15年5月

鑑品種は日1×支4を用ひボール箱育、綿布育、對 照区、木箱育に分ちたるに繭絲繊度は綿布育最も太 〈ボール箱育最も細し。

(132) 普通育と濕布育との比較試驗

商杉宗治 岐阜蠶試報第4號 大正15年5月 支101×日107を用ひ標準區(普通育)、濕布育區A (3齢輸食迄)、濕布育區B (5齢輸食迄)の3區とし 7月16日掃立てたるに繭絲繊皮は濕布育區 B 最も太 く標準値最も細し。

(133) 普通宵と濕布育竝にボール箱育との比較試驗

高杉宗治 岐阜鷺試報第4號 大正15年5月

日107×支101を用ひ標準、濕布育ボール箱育に分 ちたるに繭絲繊度は濕布育最も太くボール箱育の方 が細し。

(134) 普通育と濕布育並に箱育との比較試驗

高杉宗治 岐阜鑑試報第4號 大正15年5月 日107×支101を用ひ標準、瀑布、木箱、ボール箱 の4區に分ちたるに繭絲織度は瀑布育區最も太くボ ール箱區最も細し。

(135) 夏秋鷲期に於ける稚蠶飼育法に就て

野瀬直毅 石川縣蠶試報第1號 大正15年10月 標準區

温布育第2區 稚蠶付給桑時温布25°C 乾温球の 第3°C目的。

濕布育第3區 稚蠶期高温乾燥の時のみ濕布、目 的温濕度上に等し。

箱飼第2區 稚蠶箱内飼育、1日3.4回給系 箱飼第3區 稚蠶箱内飼育、1日5.6回給系 乾布育區 滅布育と同様の裝置その他の處置 は箱飼第3區に準ず

繭絲繊度は第1年目には日107×支101を用ひしに脇 布育第2區最も太く瀑布育第3區之に次ぎ標準區最 も細し。第2年目には支9×日107を用ひ稀蠶室內育 と普通蠶室內育に分もたるに標準區、乾布育區は共 に繊度太く箱飼區は細き傾向あり。

(136) 瀬に鰯する調査及試験

滋賀縣蠶業試驗場 滋賀縣蠶試事績報告第15號大 正15年

1. 飼育法との關係 日1號×支4號

試験區を普通育、濕布育(3 齢まで濕布育北鐵普通育)、箱飼育(3 齢まで箱育 4、5 齢普通育)、條業育(稚蠶期普通育)の4 區を設け各區共同一業を給與し試験せるに滿絲織度は、普通育太く箱飼育之に次ぎ修築育濕布育に於て精細し。

 用途別添闹に依る発薬の硬軟との關係 目107號 ×支101號
 ×支 9 號

試験區を容秋試練用桑園及夏秋試專用桑園となし 夫々標準區、硬葉區、軟葉區に分ちたり。繭絲纖 度は容秋兼用桑園硬葉區最も太く、軟葉區之に次 ぎ、夏秋蠶專用桑園標準區、軟葉區、溶秋兼用桑 園の標準區の順に翻く夏秋蠶專用桑園の硬葉區最 も細し

(137) 普通商と半密閉商との比較試驗(秋)

福島縣蠶業試驗場 福島縣蠶試報告1號 昭和2 年3月

日107×(支101×支4) を用ひ試験せるに繭絲繊度には1定の傾向なし。

(138) 醤通育と撒土育との比較試驗

福島縣鑑業試驗場 福島縣鑑試報告1號 昭和2 年3月

日107×(支4×支101) を用ひ試験せるに繭絲繊度 は雨者に差を認めず。

(139) 普通育と箱飼乾布育との比較試験(春)

福島縣蠶業試驗場 福島縣蠶試報告1號 昭和2 年3月

日1×支4を用ひ普通育、箱飼、乾布育を設けたる に繭絲繊度は本場にては箱飼概して細いが支場にて は却つて箱飼が太い。

又同品種で1齢間、1.2齢間、1-3齢間の箱飼と對照 區との繭絲繊度を比較せるに箱飼期間の長い程細い

(140) **普通宵と箱育、濕布育との比較試験(秋)** 商島縣蠶業試験場 商島蠶試報1號 昭和2年3月

日107×(支4×支101)を用ひ普通育と箱飼を比較 せるに繭絲繊度は箱飼が細い。 同品種を普通育、箱飼、濕布育とせるに本支場共 に箱飼、濕布育は繭絲織房細い傾向あり。

(141) 飼育法試驗

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告9號 昭和2 年3月

春、日1×支4を用ひ普通育、全芽條桑育、箱飼普 通育、剉芽全芽育(區名の先稚蠶後壯蠶)をなした るに繭絲繊度は箱飼に細し。

秋、普通育、全葉育、濕布育普通育、密閉育普通 育、全芽育をなしたるに繭絲繊度は濕布育普通育區 密閉育普通育區に細し。(蠶品種は目107×(支4×支 101) なり)

(142) 特殊飼育法試驗成績

非森京之功、武巌敏一 岐阜鑑試報第5號 昭和 2年6月

(1) 春蠶期

支4×日1及歐7×支7を用ひボール箱育、木箱區、 濕布育區、撒土育區、對照區としたるに繭絲繊度は 支4×日1では對照區最太く撒土育區最和し。歐 7× 支 7 では濕布育區時に太し。

(2) 秋耀期

國富×浙江及大黑×支4 布育、撒土育、密閉育、對照育の5 區別としたるに 繭絲繊度は國富×浙江では濕布育、最も太くボー ル箱育、對照區之に次ぎ他は細し。大黑×支101 では撒土育最も太くボール箱育最も細し。

(143) 函飼給桑法試驗

和歌山縣蠶業試験場 和歌山縣蠶試報告 9 號 昭 和2年7月

歐7×支4を用ひ鑑箔剉芽育、面例剉芽育、面個金芽育となす。 繭絲繊度は面側金芽育太く、 函例剉芽育細し。 即ち試験を通じ1定の傾向を認めず。

(144) 晚秋쮋稚飄飼育法試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告9號 昭 和2年7月

青熟×支101を用ひ普通育、函飼育、濕布育、半 濕布育、覆蓋育、活葉育となしたるが關絲裁度には 差異なし。

(145) 秋蠶特殊飼育法試驗成績

高杉宗治 岐阜蠶試報第6號 昭和3年7月

日107×支101及浙江×國富を用ひ標準區、箱育區 濕布育區、乾布育區、撒土育區としたるに關絲纖度 は日107×支101では箱育區最も太く標準區最も細し 國富×浙江では箱育區、標準區の順に太く撒土育區 最も細し。

(146) 夏秋鷸特殊飼育比較試驗

宁都宫丽一、神利義清 愛媛縣蠶試報告第20號 昭和4年4月

日107號×支9號、日107號×支4號、試驗區を地下室A區(3 齡まで地下室に何育4.5齡普通育)、地下室 B區(3 齡まで提問地下室、夜間及眠除後は蠶室4.5齡普通育)、地下室 C區(3齡まで普通育4.5齡地下室)、地下室 D區(全齡地下室) 箱何區(3齡まで結何4.5齡普通育)、濕布育(3齡まで濕布育4.5齡普通育)地下室箱何區(3齡まで地下室に於て箱何4.5齡普通育)、屋外箱何區(3齡まで屋外に於て箱何4.5齡普通育)、標準區(全齡普通育)の9區とす、繭絲越度を見るに秋蠶に於ては各區間に一定の傾向を認め攤き、地下室各區に稍細き感あり、地秋蠶にありては漲布區、及び標準區に太く、稍細きは箱何育にして共の他の區は兩者の中間にして各區間大常なし。

開放育と密閉育との比較試験

試験區を第1 版 (開放室にて全齢飼育)、第2 版 密閉室にて金齢飼育)、第3 版 (3 齢まで開放室4.5 齢 密閉室に飼育)第4 版 (3 齢まで密閉室4.5 齢開放室)第5 版 (基間密閉室、夜間開放室)、第6 版 (基間開放室、夜間密閉室)、第7 版 (全齢普通室にて普通育)の7 版とせり。

繭絲織度は秋蠶に於て第1區及第3區最も太く、 第2、7、6之に亞ぎ第 4.5區稍細し、晩秋蠶にあ リては各區間に大差なし。

(147) 飼育法比較試驗

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告14號 昭和5 年3月

春、目1×支4を用ひ普通育(粗剉桑、全芽)條桑 育(壯蠶期のみ)、箱伺(壯蠶普通)、透明紙覆育(壯 蠶普通育)となしたるに繭絲繊度大差なけれども普 通育稍太く、透明紙覆育稍々細し。

(148) 春蠶稚蠶飼育法試驗

山口縣蠶試 山口蠶試報告第1號 昭和6年2月 支7×歐7を用ひ、障子育、調氣育、撒上育、箱育、地中 育、普通育を行ひたるに繭絲織度は箱育最も太く地 中育特に細く他は中間にありて標準育と大差なしo

(149) 秋麗飼育法試驗

静岡縣蠶業試験場 静岡蠶績第19 昭和6年3月 蠶品種は國富×浙江を用ひ、普通育7回給桑、普通育5回給桑、函側2回給桑、函側3回給桑、函側4回 給桑、函内撒士育4回給桑、被援飼2回給桑、被役 個3回給桑、被覆何4回給桑、被覆內撒土何育4回給桑、撒土何育4回給桑の11區に分てり。繭絲繊度は初秋期には普通育7回給桑區斷然太く被覆何4回給桑及被覆何2回給桑區特に細し。晚秋期には函內撒土育4回給桑區最も太く被覆何4回給桑區最も細し。

(150) 飼育形式が飜に育ぼす關係試驗

大八木實司、注原弘一、伊達實、下村信男 鳥取 縣蠶試報告 第4號 昭和6年5月

(151) 秋駕特殊實に關する試驗

蛛岡秀夫、福滿直二、堀之內綱雄 鹿兒島蠶狀報 告 第4號 昭和6年8月

1. 箱飼、濕布育に關する試験

試験區を箱飼甲區(ボール紙區)、箱側乙區(木箱) 濕布育甲區(稚蠶期濕布育)、濕布育乙區(稚蠶期A M8~PM5の間濕布育)、濕布育內區(稚蠶期80°F以 上の場合に濕布育)、蠶箔濕潤區(覆蓋育)、對照區に 分ち蠶品種は(支101×支9)×日107を用ひ、桑は赤 市を給與す。織度は對照區最も太く、箱飼甲區、濕 布丙區は對照區より微かに細く、箱側乙區、蠶箔濕 潤區特に細し

2. 全芽育に關する試驗

,試験區を春刈金芽區、夏刈金芽區、劉照區 (稚蠶期型桑育、4、5 齡金芽育) に分け (支101×支9)× 目 107 を用ひ桑は改良鼠返を用ひ秋期に試験す。繊 度は金芽給與區は劉照區に比し太く春刈と夏刈との 間には大葉なし。

. 3. 特殊育に關する試験

秋期日1×支101を用ひ密 阴 育區、 濕箱育區 (稚 蠶期のみ 行ひ 壯蠶期屋外テント育)、撒土條桑育區 (稚蠶期到桑撒土育壯蠶期屋外撒土條桑育)、對照區 (普通育) に分け桑は 稚蠶期改良鼠返、 壯蠶期改良 鼠返及祭桑を給與す、織废は密閉育區、對照區太 〈 濕箱育區、撒土條桑育區、 甚だ細〈中でも撒土條桑 育最も細し。

(152) 春麗殊殊育に關する試驗

味岡秀夫、福滿直二、初生貞秋、堀之内綱雄 鹿 鬼島縣蠶試々驗報告第4號 昭和6年8月

1. 箱側甲區(ボール箱)、箱側乙區(木箱)、鍋照區に分く、供試鑑品種は日1×支4なり、桑品種は稚蠶期赤市、北鑑期巻桑、清十郎を用ふ。 繊度は箱飼甲區太く他2座は同一なり、而し各區間の差は少し。

- 2. 箱侗育區(木箱)、搬土育區(毎給桑蘭に撒土 ナ) 温床育區、對照區に分けて稚識期を飼育す。供 試蠶品種は1.と同じ、桑は稚識期赤市壯蠶期主に改 良園返なり。 繊度は撒土育區最も太く箱飼育區之よ り微かに細く對照區最も細し。
- 3. 箱飼育區(水箱)、密閉育區(稚蠶期のみ)、撒 土育區(金齡問行ふ)屋外條桑育區(五齡期のみ行 ふ)、對照區に分け日1×支4を以て飼育す、添は稚蠶 期は赤市、非蠶期は主に野桑を用ふ、繊皮は撒土育 區幹に太く、對照區之に次ぎ箱飼育區最も細し。
- 4. 密閉育區 (種鑑期箱何密関育非鑑期普通育)、 撒土育區(種鑑期のみ行び非鑑期は普通育) 行焼甲區 (種鑑期行燈様小室にて湖木箱飼育し非鑑期屋外テント内にて作業育)、行煙乙區 (種鑑期间上非鑑期普 通育)、屋外條業育區 (5 齢期のみ) 照明育區 (サンランプを夜間照射飼育)、對照底に分け日1×支4を用ひて試験す。 繊度は行燈乙區最も太く照明育區、撒土育属密閉育區之に次ぎ行燈甲區、屋外條業育區、對照底稍々細し。
- 5. 箱甸甲區(稚蠶期木箱甸)箱甸乙區(稚蠶期撒水木箱內甸育壯蠶期屋外條桑育)、活條育區(稚蠶期にのみ行び壯蠶期は條桑育)撒土育區(全輸間撒土し壯蠶期は條桑育)密閉育區(稚蠶期行ひ壯蠶期屋外條桑育)對照區に分ち日1×支4にて飼育試験す。桑は稚蠶期赤市壯蠶期改鼠を用ひ、繳建は對照區最も太く活條育區之に次ぎ箱飼乙區最も和しされど各區間の差極めて少し。

(153) 秋蠶飼育法試驗

山中德三郎、羽生貞秋 鹿兒鳥縣蠶試々驗報告第 4號 昭和6年8月

試験區を標準區(稚蠶到芽肚蠶全葉)、平何區(稚蠶 到芽肚蠶平領) 箱何區(稚蠶箱何肚蠶全菜) 濕布育 (稚蠶濕布育壯蠶全菜) 活條育區(稚蠶活條育壯蠶 金葉) に分け日1×支101を以て何育す。桑は稚蠶期 改良鼠返壯蠶期魯桑を用ふ。繊度は濕布育區特に細 けれども他區は殆ど差異なし。

(154) 夏秋蠶飼育法試驗

大分蠶試 大分蠶試事績報告第14號 昭和6年11 月

標準、箱飼、濕布育、安全育、全芽育、條柔育の 6 属とし鑑品種は日110×支103 を用ひたるに繭絲織 度は箱飼育最も太く全芽育區最も細し。

(155) 箱飼に関する試驗

河田和一、松尾重晴 京都府讖試彙報第1號 昭 和7年2月 鑑品種は支 18×阪16日110×阪17を用ひ箱倒と普 通育とを比較せるに繭絲繊度は発は箱飼稲々太き傾 向あり、初秋は差異なく晩秋も同様なり。

(156) 飼育法試驗

小松茂久、澁谷綠、中山高松 神奈川蠶試報 第2 號 昭和7年3月

種蠶期飼育方法を分ち活発、箱飼、高級、密閉、 屋外條築、屋内條築、普通の7 區とし蠶品種は奉は 支14×歐17、秋は相模×支105 を用ひた。繭絲織度は 奉は各區間に大差なし。初秋は密閉育最も太くその 他の區間には大差なし。 與秋は各區間に大差なし。 (157) 稚뾃期飼育容器賦験

栃木蠶試那須支揚 栃木縣蠶試那須支場事報 昭 和7年4月

標準、角離、丸離、段ポール、木箱の5 區とし蠶品種は春支4×日1、初秋支105×日110 晩秋支105×日 110 を用ひた。繭絲織度は春は丸離區最も太く標準 [版最も創し。初秋は木箱區、標準區最も太し。晩秋は角雛最も太く段ポール最も割し。

(158) 飼育法試驗

古性淺夾郎、火友安太郎 秋田蠶試蠶事報告 第 8 號 昭和7年4月

脊盤には稚園安全育北鑿普通育、稚園園育北徽普通育、稚園活系育北蠶普通育、稚園活然育北蠶普通育、稚園活然育北蠶普通育、稚園活然育北蠶性蒸育、全齡普通育の6 區とし秋 遺には春賦の稚園普通育北蠶條業育の代りに稚園普通育北蠶年飼育を加へて同様6 區とし寄は日 1×支4, 秋は日110×支105を用ひたり。繭絲繊度は春は最も太きは行燈育と函飼育にして最も細きは活業育なり。秋は安全育最も太にして活業育と平何最も細し。(159) 飼育法試験

福島縣蠶業試驗場 福島蠶試報母4號 昭和8年3月

祭は普通育、密閉育、條桑育、最高級育、安全育 屋外條桑育をなし。秋は普通育、密閉育、全芽條桑 育、最高級育、安全育をなしたり。鑑品種は茶は福 島歐白×支4號、阪17×支14, 阪17×支105, 秋は支 103×日110を併用す。試験の結果は繭絲織度に関し ては次の如し。

粋は依柔育は太き傾あり。秋は一定の傾向を認めず。

(160) 飼育型式に關する試驗

味岡秀夫、羽生貞秋、堀之內綱雄 鹿兒島縣蠶業 試驗場報告第20號 昭和8年3月

1. 脊蠶稚蠶飼育型式に關する試驗

本面飼育區、飼育器育區、湯面育區、多条育區、 法條育區、條条育區、對照區の7個を設けて稚蠶期 を飼育し、別蠶期は一様に平面條条育とす。 試品種 は歐17×支14を用ふっ

織度は對照區最も太く、多桑育區、侗育器育區、 木箱侗育區、條桑育區の順に細しo

2. 秋蠶稚蠶飼育型式に關する試験

稚識期を預備甲區、函個乙區、撒土育區、行燈總布 育區、活條育區、條条育區、全芽育區、對照區の8區に 分け壯議期は一樣に全薬平例とす、 蠶品種は 支102 ×目110, 日110×支105を用ふ。 繊度は全芽育區最 も太く對照區、撒土育區之に次ぎ箱匍乙區最も創し。 3. 春靏壯蠶屋外個育型式に關する試驗。

歐17×支14を用ひ稚蠶期は一様に蠶室内で普通到 系全事育とし用蠶期を4、5 歸屋外區、5 齡屋外區、 新面條凳區、屋根形撒土條凳區、吊棚平面條凳區、 無台平面條凳區、金芽平何區、對照區の8 區に分け て試験す繊度は吊棚平面條凳區最も太く、斜面條凳

属最も細し、されどこれ等の差顯著ならず。

4. 添蠶用蠶屋外飼育場所並補溫に關する試驗。 支14×阪17,支14×阪16を用ひバラック内4 齢値 (4、5 齢間補温)、バラック内5 齢値(5 齢期補温) バラック内對照極(補温せず) 天花内對照區(補温 せず)の4 値を設けて試験す、繊度はバラック5 齢 區特に太く他は大差なし。

5. 秋鑑壯鑑屋外飼育に關する試験。

6. 秋蠶壯蠶屋外補温に關する試驗

日110×支105を用ひ巻桑を給與し4齢補温區、5 齢補温區、4、5 齢補温區對照區の4 底に分けて試験 す。繊度は4齢補温區最も太く5 齢補温區、對照區 の順に細く4、5 齢補溫區最も細し。

(161) 箱飼に關する試驗

德島縣蠶業試驗場 德島縣蠶試報告7號 昭和9 年3月

昭和6年春は歐9×金貴にて密閉室亜鉛箱、密閉 室木箱、密閉室段ボール箱、密閉室普通育、普通室亜 鉛箱、普通室木箱、普通室段ボール箱、普通室普通 育の各區を作る。

秋は支105×目110にて運鉛箱、木箱、段ボール箱

普通育、撒土亜鉛箱、撒土木箱、撒土段ボール箱、 撒土普通育を作る。

昭和8年春は歐16×支14にて亜鉛箱桶濕、木箱桶 濕、普通育、亜鉛箱撒糠、木箱撒糠、亜鉛箱の属を 作る。秋は日7×支106にて前年秋と同じ風及び齋藤 式亜鉛箱属を設けたり。

以上全試験區を通じ繭絲織度の調査あれ共太き區 が翌年細き事等ありて一定の傾向を認めず。

(162) 特殊育竝に特殊上族に關する試驗

忠清南道原蠶種製造所彙報第3號昭和9年8月

(1) 稚蠶期特殊飼育法試驗

鑑品種は弊はト 3×支4,秋は(支9×支101)×日107を用ひ謝照區、箱側、高級育、行燈育、乾布育 瀑布育、活桑育、密閉育(秋のみ)等をなして奈秋 2期に飼育した。繭絲織度は高級育最も太く箱飼行 燈育之に次ぎ他は大差なし。秋は行燈育最も太く對 照區箱飼之に次ぎ活桑育最も細し。

(2) 屋外飼育試驗

羅品種は発期歐 3×支4、秋期 (支9×支101)×日107を用ひ発は對照區、4 齡以後屋內條業育、5 齡以後屋外條業育、5 齡以後屋外條業育とし秋は對照區、4 齡以後屋內平侗、5 齡以後屋外平侗、4 齡以後屋外平侗、5 齡以後屋外平侗、4 齡以後屋外平侗、5 齡以後屋外平侗としたるに職絲織度は発は5 齡以後屋外條業育最も細し。秋は5 齡以後屋外平侗最も太く對照之に夾ぎ4 齡以後屋外平侗最も細し。

(3) 屋外上蔟試驗

鑑品種は容期隊 8×支4, 秋期 (支9×支101)×日 107を用ひ對照属と 屋外上漲属とに分ちたるに容秋 共に屋外上蔟属の方太し。

(163) 蠶兒飼育箱の装置に關する試験

岩間茂平、入江喜三 山梨蠶試彙報第5號 昭和 10年8月

- 支14×歐17外2品種を用ひ對照鷹、濕土區、燒糠

區、無緣區、多緣區、厚何區、箱限區、補緣半減區 木箱育區とせるに關絲繳度は発は各區大差なく唯緣 土區、多緣區稍々細し。初秋期は賴糠少區最も太く同 多區最も細く他は大葉なし。 贮秋期は稍緣半減區、 對照底太く燒糠多區最も細し。

(164) 審網稚羅飼育法試驗

池江郑二 長崎鴛試報第3號 昭和10年8月

行燈育、箱飼育、普通育をなし蠶品種は歐16×支 13としたるに繭絲織度は各属間署るしき業界なきも 普通育精々太き傾向あり。

(165) 箱飼に於ける飼育選度に關する試驗

宮崎重美 京都府蠶試報告第5號 昭和11年6月 陝18×支16を用ひ22°C, 25°C, 27.5°C, 30°C に て箱飼、熱布育、普通官を行ひたるに蘭絲黻度は稚 蠶飼育温度高きに從ひ概して太く、何育法別には箱 個、熱布育區太く普通育區細し。

〇以上ノ外下記ノ抄錄番號參照 (119) (167) (169) (207) (215) (216) (241) (245) (247) (249) (251) (338)

飼育の(4)飼育型式II

(普通育、平衡、條系育、等實驗例18)

普通育、平侗、條整育を比較せる場合に條整育平 侗育共に普通育よりも細く、又平侗育と條整育とを 比較せる場合には兩者殆ど差異なきが如きも時に平 侗育の方称々太き場合あり。

尚平侗育の場合に夏秋期に於ては 4、5 齢又は5 齢を屋外或は屋内にて侗育しても差異殆どなし。

(166) 夏秋戰飼育法試驗成締

田中福雄、山崎宏一 長野縣松本原蠶種製造所蠶 事報告第2號 大正11年2月

日本錦、日106×支8,日105×欧9の3蠶品種を用ひ標準属(普通育)、大形(到桑)標準属、大形面積 3 割減、大形面積 3 割減、大形面積給桑 3 割減、全薬面積給桑 5 割減、平何、係桑育の9 属としたるに繭絲織度は全薬面積給桑 5 割減属最太 4 平何區、大形面積 3 割減區之に次ぎ大形面積 給桑 3 割減區最 4 和し。

(167) 蠶に關する調査及試驗

滋賀縣蠶業試験場 滋賀縣蠶試事結報告第14號 大正14年

1. 飼育法との關係 日1號×支4號 茶蠶期 普通 育(1、2 齢剉系 3 齢以後全芽)、濕布育(稚蠶 期)、條聚育(稚蠶期普通育)の3 區に分ち比較せる に繭絲繊度は普通育剤々太く、濕布育之に次ぎ條 系育に於て幾分細し。 2. 稚鑑期用梁の硬軟との關係 支7號×歐7號、稚 鑑期市平、壯鑑期金子、廿樂梁、を使用したり、 標準區は1、2齡剉桑3齡以後金芽とし普通育と す、硬葉區、軟葉區何れも壯蠶期は普通育とす、 繭絲織度は硬葉區太く、標準區之に次ぎ、秋葉區 稍々細し。

(108) 全齢條桑富試驗

和歌山縣蠶業試験場 和歌山縣蠶試報告10號昭 和8年7月

支4×日1を用ひ(1)區(稚蠶箱飼、非蠶普通育)、(2) 區(稚蠶箱中條桑非蠶條条育)とす。繭絲織度は(2) 區細し。

(169) 飼育法に關する試験

松永實 石川蠶試報第3號 昭和4年8月

(1) 普通育と平何育

一自109×支103を用ひたるに繭絲繊度は平何育の方 粉々太き傾向あり。

(2) 普通育と長野式新飼育

長野式新飼育法とは12 齢覆蓋、3 齢普通、4 齢 平個、5 齢蠶箔飼育等を行ふものなり。 繭絲繊度は (1)と同一蠶品種を用ひたるに普通官の方利々太き 傾向あり。

(3) 普通育と撒土育

日109×支103を用ひたるに繭絲繊度は大差なく撒 土育の方稍々太き傾向あり。

(170) **夏秋飜平詢に關する試驗** 水野保、大關豐、 造羽登代夫 夹城蠶報第4 昭和7年7月

普通育區、45 齢室内平伺庫、5 齢間室内平飼育 45 齢屋外平飼育區、5 齢間屋外平伺庫とし靏品種 は年により異り日 110×いはらき、月110×支105を 用ひた。繭絲繊度は各區間に殆んど差異なし。

(171) 條桑育及平飼育に關する本場並委託試驗成績

要媛縣鑑業試驗場 愛媛鑑試彙報2號 昭和8年2月 支4×歐17、伊豫歐黃×伊豫金黃、歐17×支105等を 用ひ春、夏、秋に試驗場及委託試驗をなしたるがそ の成績によれば條系育、平何育は繊度に於て普通宵 と大差なし。(委託試驗春に於て少し〈條系育は繭 絲織度が普通育より細き傾向ある場合あり。)

(172) 秋麗飼育法試驗

小松茂久、澁谷綠、山口一雄 神奈川蠶試報 第 3 號 昭和8年6月

(1) 平伺に關する試験

屋外45齡平侗區、屋内45齡平侗區、屋內5齡 平侗區の3區とし日110×支106を供用せり。 繭絲織 度は大差なく屋外45 船平側區和み太し。

(2) 平侗と條桑育との比較試験

45 齢平側属と45 齢條系育属に分ち目110×支106 を供用せり。 繭絲繊度は45 齢條発育属稍々太し。

(3) 條桑育の面積に關する試験

標準區、2割5分減區、5割減區の8 區とし目110 ×支106を併用せり。 繭絲纖度は5割減區他2 底に ・ 比し程々細し。

(173) 飼育に關する試驗

宮崎縣鑑試 宮崎縣鑑試彙報第1號 昭和9年7月 歐3×支7外7 品種を用ひたるに 繭絲繊度は普通育 は春秋を通じて條業育より太く、平何と普通育とは 一定の關係を認め離し。

(174) 平座資に關する雛者

宮崎重美 京都府鑑試彙報第5號 昭和10年10月 晩秋期日7×支106を用ひたるに平座育は普通育に比 し繊度細し。

共他 (188) (190) (212) (232) (242) (243) (248) (260) (338)

飼育の(5)飼育型式 II

條桑育 (實驗例18)

條桑給與法、條桑仕立法、給與時期等に關し成績 あれども區々にして一定の傾向を認め難し。

(175) 春蠶條桑育に闘する試驗

徳島縣蠶業試驗場 徳島縣蠶試々驗報告第3號 大 正13年8月

- 1. 3 齢後條業育属、4 齢後條業育属、5 齢條業育 属に分も除7×支7を以て何育す繊度は4 齢後條業 育區太く5 齢條業育區最も細きも各属間差大なら ず。
- 2. 5 齢尺坪頭數150頭區、同200頭區、同250頭區、同300頭區とし限7×支7を以て試驗せる場合截度は250頭區最も細く他區間には大差なきも300頭區最も太し。
- 3. 上族方法により一齊上張區、2割拾取後一齊上 族區、5割拾取後一齊上族區、全部拾取區とし、蠶 品種は歐7×支7なり。織度は各區間殆ど差異なき も一齊上族區附細く、2割拾取後一齊上族區最も 太く、全部拾取區之に次ぐ。

(176) 春蠶條桑育に關する試驗

德島縣蠶業試驗場 德島縣蠶試報告4號 大正15 年3月

歐7×支7を供用條桑育とす。繭絲繊度は

1. 3齢以後、4齢以後、5齢以後の何時條桑育を始

むるも隣縁繊度に差なし。

- 2. 尺坪150頭-300頭と蠶座面程に廣狭を作りたる に繭絲織度には1定の傾向なし。
- 3. 熟蠶の拾取方法として一齊上族も全部拾取り方法も關絲織度に差なし。

(177) 簡易室内條桑育に關する試驗

德島縣蠶業試驗場。德島縣蠶試報告5號 昭和4年 3月

職7×支7を用ひ4齢以後バラツク條系育属、5齢以後バラツク條系育属、普通育属を設けたるに繭絲織 度は4齢以後バラツク條系育属が稍々細し。

(178) 稚蠶小室育壯蠶條桑育に就て

- 山形縣武武 山形鑑試彙報第2號 昭和4年4月 | 電品種は日1×支4, 青熟×支101 に付き 森秋2期 に亙り試験した。

試験區は稚蠶飼育器の大小、補温材料、蠶座面積 其の他除沙、給素法及上叢法を異にして6 區別とし たるにそれ等飼育法と繭絲織度の間には一定の關係 を認め難し。

(179) 春闊期の稚雛修及畜試験

野中幸兵衞外2名 埼玉蠶試棗報 第4號 昭和5年 3月

日1×支4他2品種を用ひ一齢條業A區(鑑座面積到 業金芽區の7割)、1 齢條業B區 (鑑座面積到業全芽 區の五割)、2 齢條桑區、活桑區、倒桑全芽區とした るに繭絲繊度は年により細太の關係一定ならず。

(180) 春蠶壯蠶飼實法試驗

(181) 夏秋蠶條桑育に關する試驗

松永寶 石川蠶試報第5號 昭和6年8月

日110×支103を用ひ標準區(普通育)、春刈區(春 刈桑を4齢迄給與し5齢條桑育) 春刈摘桁區(春刈 桑楠梢桑を4齢迄給與し5齢條桑育) 夏刈區(4齢 迄夏刈桑給與5 篩條桑育)の4 區としたるに繭絲織 度は概して春刈摘梢區最も太く夏刈區、標準區之に 次ぎ春刈區最も細し。

(182) 夏秋蠶條桑育試驗成績

一岩间茂平、入江喜三 山梨縣蠶試報告 第2號 昭 和7年6月

北鷺期條桑育に於て桑の仕立法を特別仕立とし給 桑形式を異にした場合繊度は對照區(普通育)より

(183) 夏秋쮔條桑窩に關する試驗

水野保、大關豊、高野平 - 茨城蠶試報告 第4號 昭和7年7月

秋默には普通育、條業育、再發芽修業育の3 区と し築は改鼠、默は年により異り日110×いはらき、日 110×支105を用ひた、職絲織度は各庭間に差異なし。

(184) 繭質向上から觀た5齢飼育

牧野純三 蠶業新報478 昭和8年5月

(1) 5 齢の飼育法と蘭智

(2) 5 齢の何育而積と繭質

標準、厚飼、薄飼に三大別し更にその各々を給発 量により標準量、5割減量に分つ。繭絲繊度は蠶座 面積の廣きに從ひ又給発量多きものが太い。

(185) 稚耀條桑育の實驗成績

期口宜之、岸田豊 蠶業新報第42卷No.4 昭和 9 年 4 月

供試鑑品種は歐17×支105, 歐17×支14, 歐18× 支 106 を用ひ標準域、非蠶係発育域、全齡條業育域の 3 属を設けて試驗せり試驗成績中級度に就いて見るに標準域最も太く僅少の差で非電域が之に次ぎ全齡條業育磁最も細し。

(186) 春蠶條桑育試驗

福島縣蠶業試驗場 福島蠶試報告5號 昭和10年 7月

歐17×支105, 歐17×支14, 歐18×支106を用ひ標 連區 (1.2齡到芽、3.4.5齡全芽) 北蠶條桑育區、全 齡條桑育區を設け試驗したるに定粒線絲一粒繊度は 全齡條桑育區稍細いが大差なし。

(187) 夏秋蠶條桑育に關する試驗

福島縣蠶業試驗楊 福島蠶試報告5號 昭年10年 7月

- 1. 夏秋蠶條桑育と桑品種との關係につきて日110 ×支105,支106×日7の蠶品種を用ひ大葉早生、改 良鼠返、魯國野桑の條系を與へたるに繭絲繊度は改 良鼠返條桑育が細い。
- 2. 夏秋蠶條業育と桑樹仕立法との關係につきて 同じく2つの蠶品種を用ひ、根刈普通育属、奈切中

間伐截區、春切殘芽伐截區を設けて條桑育をなしたるに繭絲繊度は 根刈普通區が 稍々太く 他は 略々同じ。

3. 普通育、夏秋期枚條伐微條条育、全芽育成條 伐戦條桑育の3區にて試験せるに關絲繊度は全芽育 成條伐戦條桑育區の繊度は稍々太い。(靏品種は日 110×支105及日110×支106)

(188) 壯國飼育法試驗

山口縣蠶業試驗場 山口縣蠶試彙報第6號 昭和 11年3月

- 1. 泰期州鑑期に支14×歐16を用ひ全芽育區、改 良富士形條業育區、2段式改良條業育區、屋外條業 育區、露天育區とに分けて飼育す、織度は露天育區 最も細く2段式改良條業育區最も太し、されど各區 とも大達なく一般に屋内飼育のものは屋外飼育區よ り太き傾向あり。
- 3. 晩秋蠶壯蠶期に於て日110×支105を以て標準 區、平飼育除沙區、同無除沙區、條桑育70坪區 (蠶 座面積70坪) 同2割5分減區 (52.5坪)、同5割減區(35 坪)、富士形全葉育區、屋外育區に分けて飼育の場合 繊度に於ては屋外育區、無除沙區、富士形全葉育區 細く70坪區、2割5分減區、標準區、稍々太し。
- 4. 晩秋鑑壯鑑期に於て日110×支106を以て平何 育と條藻育とにした場合に繊度に於ては條藻育の方 稍々太し。

其他 (206) (207) (208) (236)

飼育の(6)飼育型式 IV 雜 (實験例15)

雑多にして結論を得ず。

(189) 飼育試験

横田县太郎、荒井馬次 東蠶講習所蠶事報告第29 號 明治39年12月

蟻量1匁づつ12區に分けて同一の下に何育し4齢 起除の際に12區に分ちたる蠶兒を1區より3區までを 集めて標準區とし4及5區を合せて甲區とし6,7,8, 區を合せて乙區とし9,10,11,12區を合せて内區 となす、蠶品種は小石丸なり。甲、乙、丙の3區を 枠飼とし標準區は普通育をす、繊度は標準區最も太 く丙區之に次ぎ甲醛最も細し即ち甲、乙、丙3區を 比ぶれば薄飼なる甲區最も細きこととなる。

(190) 各種飼育法藏質調査

植松治賢 衣笠蠶報第第226號 大正14年5月 折衷育、アイデアル、密閉育、條桑育、アンギン 育、紙帳金芽育、金芽育等の飼育法にて差蠶家の倒 育せるものに就きて検するに繭絲繊度は折衷育最も 太く密閉育、金芽育之に次き條桑育最も細し。

(191) 自然力を利用する春蠶兒の溫床圏莚放養 に闘する試験成績

西川砂 岐阜蠶試報第4號 大正15年5月

日1×支4を用ひ標準區、稚蠶室內壯蠶覆遊區、稚蠶溫床壯蠶覆莚區、稚蠶溫床壯蠶覆莲屋外上羰區稚蠶溫床壯蠶室內區、全齡溫床區、3齡迄放養45齡覆遊育の7區としたるに繭絲纖度は稚蠶溫床壯蠶室內區、稚蠶室內壯蠶覆莚區太く3齡迄放養45齡覆莚區は最も細し。

(192) 自然の低溫を利用する秋鑑兒の冷床育に關する試驗成績

西川砂 岐阜蠶試報第4號 大在15年5月

日107×支101を用ひ標準區、稚蠶冷床孔蠶室內庭 金齡冷床區、金齡冷穴區の4區としたるに繭絲繊度 は金齡冷床區最も太く標準區最も細し。

(193) 地熱の低溫を利用する秋鑑兒の冷床林間に 於ける飼育と鑑作の豊凶に關する試驗成績(第2報) 西川砂 岐阜蠶試報第5號 昭和2年6月

國富×浙江を用ひ標準區の外林間、冷床、覆莚を 蠶児發育時期と組合せて飼育せるに繭絲繊度はそれ 等は何れも標準區より細し。

(194) 太陽熟を利用する春蠶兒の溫床育邇莚育に 關する試驗成績(第二報)

西川砂 岐阜蠶試報第5號 昭和2年6月

日1×支4を用ひ、標準區、稚蠶室內肚蠶撒水覆進區、全齢甲溫床區、稚蠶甲溫床肚蠶室內區。稚蠶甲溫床肚蠶室內區。稚蠶乙溫床肚蠶室內區、稚蠶乙溫床肚蠶室內區、稚蠶乙溫床肚蠶撒水覆進區の8區別とす(甲溫床とは蓄熱裝置のもの、乙溫床とは蓄熱裝置なきもの) 繭絲織度は稚蠶室內肚蠶撒水覆莲區、最も太く稚蠶乙溫床壯蠶撒水覆莲區、標準區細く他は中間なり。

(195) 太陽熱利用溫室試驗

和歌山縣鑑業試驗場 和歌山縣蠶業試驗報告 9 號 10號 昭和2年7月—3年7月

支4×歐7を用ひ普通育、稚蠶温室壯蠶普通、稚蠶温室壯蠶修築育となしたるに繭絲繊度は火差なし。

支4×日1を用ひ普通區と稚蠶溫室育とにす。 繭絲 繊度は普通育太し。

(196) 活葉育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告9號 昭 和2年7月

春支4×日1, 繭絲繊度は對照區と同じ。

(197) 春龗活葉育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告10號 昭 和3年7月

支4×日1,支7×歐7にて普通育、活薬育をなす。 謝絲繊度は活蒸育潤々太き傾向あり。

(198) 春秋晚秋飄簡易稚蠶生條育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告13號 昭 和8年5月

支13×歐16, 日110×支105につき試験せるに繭絲 繊度は對照風と同様なり。

(199) 金網製缸箔質試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告13號 昭 和8年5月

支105×日110を用ひ普通育と金網鴛箔育とをなす 繭絲繊度は後者細し。

(200) 稚蠶期に於ける啞飼の實績に就て(豫報)

山元勝 和歌山縣鑑試報告14號 昭和10年5月 春支16×歐18,秋日7×支106, 贮秋日7×支106に つき試験す。繭絲繊度は壺飼區太き傾向あり。

(201) ウルトラヴイツト硝子と普通硝子との比較 試験

山口縣蠶業試驗場 山口縣蠶試彙報第6號 昭和 11年3月

箱飼の蓋にウルトラヴイツト硝子と普通硝子とを 貼布したる場合鑑兒の生理及繭質に及す影響を知ら んとし春期は歐16×支14,支16×歐18, 晩秋期は日 7×支106,を用ひて試験す、繊度はウルトラヴイツ ト區に於て稍々太きもその差骸小なり。

(202) 有色セロフアン紙に關する試驗

山口縣蠶業試驗場 山口縣蠶試彙報第6號 昭和 11年3月

段ボール箱の蓋に貼布せるセロフアン紙の色により無色區、黄色區、橙色區、赤色區、桃色區、綠色區、紫色區、青色區、對照區に分け色の相異が蠶兒の發育及繭質に及す影響を知らんとす、供試蠶品種は発はアスコリー×支98, 歐16×支14, 支16×厥18 晩秋は歐17×支105, 目7×支106, なり。 春晩秋共

に繊度は何れも大差なく一定の傾向を認めず。

(203) 飼育環境用具並に光線に關する試驗

山口縣蠶業試驗場 山口蠶試彙報第6號 昭和11 年3月

飼育の(7)屋外育(電験例 25)

(204) 桑園に於ける蠶兒飼育法に關する研究

西川砂 岐阜蠶試報第3號 大正14年5月

(1) 稚糕兒小室内柔樹放養に關する試験成績(茶、 秋鑑)

供試露品種を支4×目1とし試験區は大正12年は標準區(蠶室内)、3 齢間桑園小室區、123 齢間桑園小室區、123 齢間桑園小室區、3 齢迄耐子障子桑園區、3 齢迄耐子障子桑園區、全齢紙障子桑園區としたるに繭絲繊度は大正12年には全齢桑園小室區最も太く標準區特に細し。大正13年には標準區最も太く会齢紙障子桑園區最も細し。

[2] <u>非</u>鑑児桑園育に關する試験成績(<u>将期)</u>**供試置** 品種 支4×日1

試驗區 覆障子區、覆莚區、覆硝子區、硝子小屋 區、藁小屋區、標準區

繭絲繊度は標準風最も太く覆硝子區之に距ぎ覆莚區、 藁小屋區細し。

(205) 屋外育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告8號 大 正15年3月

支4×日1 を用ひ室内育と屋外育とにせるに繭絲 繊度は屋外育細い。

(236) 春蠶條桑育に關する試驗(春蠶屋外條桑育に就て)

福島縣鑑業試験場 福島縣鑑試報告1號 昭和2年3月 日1×支4 及び(日1×日107)×支4につき屋内5齢 條桑育、屋内4.5齢條桑育、屋外5島條桑育、屋外4.5齢 條桑育となしたるに繭絲織度は 大差なきが屋外 4.5 齢條桑育が稍々細き傾向あり。

(207) 飼育法試驗

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告10號 昭和3 年3月

発は歐7×支7を用ひる輸送到義育とし以後を全芽 育、條義育、屋外條案育、堋立小屋條纂育、天幕内 條黍育とした。繭絲纖度は堋立小屋條繁育、天幕内 條黍育が細い。

秋は日107×支4を用ひ到桑育、企薬育、企薬育、企薬育、 濕布育、條桑育、畦立條桑育、ピラミット形條桑育、 地中育とした。繭絲織度は到桑育太く、條桑育なる 3 方法に於ては何れも細い。

(208) 春糖屋外條桑育に關する試験

田口惣一郎、片尾貞淺 埼玉蠶試彙報第1號 昭 和8年5月

脊羅期に鐵品種は日1×支4を用ひ屋外45 齢條築 育、屋外5 齢條発育、室内5 齢條発育、室内45 齢 2 段條発育の4 賦としたるに繭絲繊度は何育場所、 例育年度を異にするによりて異りたるも屋内45 齢 條発育は常に最細く室内45 齢2 段條発育賦之に大 ぎ屋外45 齢條発育賦と室内5 齡條発育賦の間にて は細太の關係一定ならず。

(209) 春瀾屋内育と屋外育との比較試験

静岡縣蠶業試驗場 静岡蠶績第19 昭和6年3月 3 齢迄室内に同一個育法をなし4 齢に屋内育と屋 外育に分つ。蠶品種は日1×支4,支7×除7を用ひた るに屋内育區は屋外育區より繊度細し。

(210) 秋靆屋内育と屋外育試驗

静岡縣鑑業試驗場 静岡蠶績第19 昭和6年3月 初秋鑑を3齢迄室内に同一飼育法をなし4齢に屋 内育と屋外育に分つ。鑑品種は日110×支103を用ひ たるに繭絲織度は屋内育區僅に太し、晩秋蠶も同様 にして屋内育と屋外育に分ち國富×浙江2號につき 試験せるに繭絲織度は屋内育太し。

秋鷺屋外育に關する試驗

味岡秀夫、羽生貞秋、堀之內網雄 鹿兒島縣蠶試 內驗報告第4號 昭和6年8月

試験區を全齢屋外甲區(稚蠶期箱飼),同乙區(稚 蠶期活餘育)同丙區(稚蠶期全芽育)、4、5 齡屋外 育區(稚蠶期全芽)5 齡屋外育區(稚蠶期全芽育) 全齢室內育區(稚蠶期全芽育)に分け、壯蠶期はい づれも全芽平飼育をなす。「蠶品種は支102×日110, を用ふ機度は全齢室內育區殊に太く、全齢屋外丙區 甲區之に大ぎ5 齢屋外區最も細し。

(212) 春瀬屋外條桑育に關する試験

味岡秀夫、羽生貞秋、堀之內綱雄 鹿兒島縣蠶試 試驗報告第4號 昭和6年8月

試驗區を全齡屋外育區 4、5 齡屋外育區、5 齡屋 外育區全齡室內育とに分け全齡屋外育區以外の區を 各々更に平面條桑區、屋根形條桑區、金芽平何區と に3分し又全齡屋外育區は箱何斜面條桑區(稚蠶木 箱甸壯蠶卻面條桑育)及普通全芽平何區(稚蠶期普 通育壯蠶期全芽何育)とに分け日1×支4を用ひて試 驗す桑は稚蠶期は赤市、壯蠶期は主に改風なり。 截 度は各區間大差なけれども全齡室內育屋根形條桑育 區最も太〈全齡屋外育箱何斜面條聚育區最も細し又 何育場所より見るときは全齡室內育區稍々太多が如 し。

(213) 秋鷺期に於ける林間鯛宵に關する試驗

味岡秀夫、福満直二、堀之内綱雄 鹿見島縣**饗**試 み験報告第4號 昭和6年8月

杉林の日蔭内の通風住良なる場所に簡單なる驚小屋を設け通風及降雨の時のみ周囲に遅を飛らして飼育す、試験區は林間甲属(条舶間飼育)、林間乙属(稚蠶期のみ飼育し壯蠶期は室內育)、林間丙属(稚蠶期室內壯蠶期林間育)、對照區に分ち日1×支101を以て試験す、系は稚蠶期赤市、壯蠶期は主として鼠返、祭業なり。越度は對照属、林間丙属共に太く林間甲属、同乙属時に細し。

(214) 屋外條祭育に關する試験

(215) 春蠶期飼育法試驗

栃木蠶試 栃木蠶績 昭和7年4月

屋外飼育試験をなさんとし試験値を大別して撒土 育と石灰育とし各々を更に開放區、折衷區、密閉區 に分ち對照として室內撒土區、室內普通區を設けた 蠶品種は 日1×支4.繭絲織度は室內撒土區及普通區 最も太く石灰育折衷區及密閉區細し。

(216) 秋觀期飼育法試驗

栃木蠶試 栃木蠶績 昭和7年4月

油紙事室に於る侗育試験なり。撒土折衷、撒土開放、石灰開放、石灰折衷、對照開放、對照折衷の外に室內撒土、室內普通の8區とし初秋は晃旭×晃龍、 迎秋は日110×支102を用ひた。各區間の侗育温度は 大体等し。繭絲織度は室內普通區、撒土開放區最も 太く石灰折衷區最も細し。晚秋は石灰折衷區最も太 く他の甌間には大差なし。

(217) 屋內外平飼試驗。

栃木蠶試那須支場 栃木蠶試那須支場再報 昭和 7年4月

- 標準區、屋内平侗、屋外平侗の3 區とし蠶品種は 春支4×日1,初秋支105×日110, 唯秋支105×日110 繭絲繊度は初秋は標準區太く屋外平侗區細し。 晩秋 は屋内平侗區太く標準區細し。

(218) 屋內外條桑育試驗

一栃木鑑試那須支場 栃木鑑試那須支場事報 昭和 7年4月

標準、屋内條系、屋外條系の3 區とし鑑品種は茶 支4×日1,初秋支105×日110,晚秋支105×日110を 用ひた。繭絲繊度は発は標準區太く屋外條系育區細 く初秋も同様にして晩秋には屋外條系育區他3 區よ り粉々太し。

(219) 條終育竝に平飼に關する試驗

产牛込正一 群馬蠶試報第11 昭和7年4月

, 希羅期には普通育の外室内及天幕内に分けその各々を更に 45 齢條発育、5 齢條発育、5 齢條発育、5 齢條発育薄 例及5 齢條発育厚何に分けた。初秋蠶及晚秋蠶には 普通育の外室内、天幕内及不影に分けその各々を更 に 4 5 齢平何、5 齢平何 薄何及 5 齢平何 厚何に分けた。蠶品種は春蠶期は支一化×歐一化性 初秋、晩秋蠶期には日二化×支二化種を用ひた。

繭絲繊度は何育法と一定の關係をみない。

(220) 桑園育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歐山縣蠶試報告13號 昭 和8年5月

支14×歐17を用ひ試験せるに繭絲織度は普通育に 比し黍闌育細し。

(221) 春蠶屋外飼育に關する試驗成績

静岡縣蠶業試驗場 静岡縣蠶業試驗場彙報第3號 昭和9年3月

1. 壯蠶期屋外試驗

4 輸以後を對照區と屋外育區とに分ちて試験す蠶品種は目1×支4及支7×阪7を用ふ繊度は對照區の方太し。

2. 全船屋外試驗。

日1×支4,支4×日1を用ひ割照區,稚蠶屋外育區 稚蠶屋内育、全齢屋外育の4區を設けて試験す、その結果織废について見るに稚蠶期屋内育區最も太く 對照區之に次ぎ稚蠶期屋外育區最も細き傾向あり。

(222) 秋蠶屋外育試驗成績

上靜岡縣蠶業試驗場上靜岡蠶葉報第6號 昭和10年

7 B

第二試驗 種識期よりの屋外育は如何なる差異を示すかを調査せんとし對照属、種鑑屋内育属、種鑑 屋外育属、金齢屋外育属に分つ、鑑品種は日110× 支105を用ぶっ

試験結果中繊度に關しては次の如し。

第一試験にては屋外育魔は劉照属より太い傾向あ り。

第二試験にては對照區最も細く稚蠶屋外育區、全 齢屋外育區最も太き傾向あり。

(223) 晩秋쮍屋外育に闘する試験

静岡縣蠶業試驗場 静岡蠶試違報第6號 昭和10 年7月

- 1. 國常×新た 2 號、日110×支102を用ひて釣照風 と屋外属とに分けて試験す其の結果繊度に關して は屋外育は劉照風より稍々太し。
- 2. 日110×支105を用ひ對照域、稚蠶屋内育區、稚 蠶屋外育區、全齡屋外育區の四區を設け試驗せる に繊度に關しては稚蠶屋内育は最も細く稚蠶屋外 育區、全齡屋外育區は對照區より細き傾向あり。

共他 (156) (160) (162) (184) (338) 飼育の(8)給桑型式 (宜験例 22)

個育時期、露品種等により一定の傾向を求め難き も顕いて云へば全芽育、稚蠶到桑肚蠶全芽育、稚蠶 到落肚蠶全葉育は滿絲織度太く條桑育は稍々細き傾 向あり。又到桑、到芽、全葉、全芽、條桑を組合せ たる場合は一定の傾向なきも全芽條桑育稍々細き場 合あり。

(224) 全芽飼育試驗

土屋泰、駒宮治作 東靉講習所蠶事報告第19號 明 治36年3月

又背を以て標準區と全芽育とに分けて飼育せるに 繊度に於ては全芽育の方稍々太し。

(225) 全芽飼育試驗

土屋泰、石野廣 東臘講習所蠶事報告第27號 明 治39年5月

小石丸種を用ひ標準區と全芽區とに分けて試験せるに標準區の方太し。

(226) 全芽育給桑比較試驗

住吉正喜、上野女熊 朝鮮總督府勤業模範場**蠶業** 試驗所彙報第2號 大正8年11月 第1區 (到発育)、第2區 (全芽育4回給発) 第3 區 (全芽育3回給発)、第4區 (12 齢到発育3 齢以 後全芽育4回給発)、第5區 (第4區と同一取扱をなし 3回給発)、第6區 (12 齢到芽育3 除以後全芽育4回 給発)とし又背を何育したるに繭絲織度は第3、4區 最も太く第一區最も細し。

(227) 飼育法改良に関する試驗〔纏報〕

自澤幹、酒井廣吉、駒村英光 上川原蠶種製造所 上川蠶絲專門學校 事績報告第3號 大正11年3月 同窓會報(10) 大正12年9月

(本試験は大正8年来の繼續試験であり89兩年の 成績は蠶事報告第一號に掲載されてゐる) 試 驗 區

普通育甲 123齡摘葉剉菜、45齡全芽 全芽育 全齡全芽

全芽型素育 123齢全芽型素、45齢全芽 普通育乙 給発法普通甲に等し

條案育 123齡摘葉剉聚、45齡條聚 新標準育甲 1齡摘葉剉聚、23齡全芽剉聚、4 5齡條聚

新標準育乙 1 虧摘葉剉系、23 酚全芽剉桑、4 酚全芽、5 酚條系

供試品種は日1×支4,及歐9の2品種なり。 掃立月日は5月13日なり。

繭絲織度は日1×支4にては金芽側系育最も太く、 全芽育、普通育乙、新標準育甲、同乙は順次細く條 業育は最も細し。歐9にては金芽育最も太く、普通 育甲、金芽剉桑育、新標準育乙、條桑育、新標準育 甲は順次細く普通育乙は最も細し。

(228) 條桑育試驗成績

岐阜縣鑑試 岐阜鑑報第1 大正11年12月 鑑品種は日1,支4,厥10,日1×支4,際6×支4を 用ひ飼育方法により6 區とせりo

區別	1龄	266	3龄	4歲	5龄	
1	剉葉	剉爽	剉葉	剉芽	全芽	
2	剉葉	剉葉	剉芽	全芽	條桑	
3	剉芽	剉芽	全芽	條聚	條桑	•
4	全芽	全芽	全芽	全芽	條聚	
5	剉葉	剉芽	條系	條察	條聚	
6	剉葉	剉芽	到莱	條聚	條聚	

但し2~5風は常温、6 區は稚蠶中高温。繭絲織 废は品種的には各區差異あれど飼育法別にみると きは各品種共通の成績を示さず。

(229) 秋蠶飼育法試驗

德島縣蠶業試驗場 德島蠶試報告第2號 大正

12年3月

日107×支9を用ひ剉桑育區、粗剉全芽育區、金葉 育區に分ちて飼育せる場合繊度は粗剉金葉育區最も 太く剉桑育區最も細し。

(230) 春驟飼育法試驗

德島縣蠶業試驗場 德島蠶試報告第2號 大正12 4F3月

試験區を到桑育區、到芽育區(3 船後全芽)、全芽育區、4、5 船條桑育區、5 船條桑育區に分け支7×除7を以て試験せるに機度に於ては殆ど差異を認めざれども全芽育區最も太く4、5 船條桑育區最も 割し、されど最太と 最細との差は0.08 デニールなり。

(231) 春蠶飼育法比較試驗

田井保次 那是試驗成績 大正13年

支7×歐7を用ひ側築育(3齢迄側桑以後全芽)、側 芽育(12齢멜芽以後全芽)、全芽育(全齢全芽)、條 桑育(稚蠶全芽肚蠶條聚)の4厩別としたるに繭絲織 度は全芽育最太く之に次いで剉芽育、剉発育、條桑 育の順なり。

(232) 秋蠶飼育法試驗

德島縣蠶業試験場 德島縣蠶試內驗報告第3號大 正13年8月

試験賦を到発育賦、粗剉全葉育賦、全芽全葉育賦 全齢全芽育賦、全齢全葉育區、全芽條発育區に分ち 日107×支9を以て飼育す繊度は大差なく到発育に稍 々細く全芽全葉育、全芽育に稍々太し。

(233) 經濟的飼育法試驗(共ノー)

茨城縣第二蠶試 茨城縣第二蠶試試驗成績第一號 大正14年10月

支4×日1を用ひ倒桑全芽育、全葉全芽育、倒芽全芽育、倒桑全芽條桑育、倒桑育の5属別としたるに 繭絲織度は倒桑全芽育風稍々太かりしも他區は差異 少し (但し春蠶期飼育)

(234) 經濟的飼育法試驗(共八二)

茨城縣第二蠶試 茨城縣第二蠶試試驗成額第一號 大正14年10月

日1×支4を用ひ倒柔育(1-4輪倒桑5輪全芽)、全 芽育(全齢全芽)、條聚育(1.2輪倒桑3輪全芽、4.5 齢條桑)の3區別としたるに繭絲繊度は倒柔育區稍々 太く全芽育區、條桑育區相伯仲し稍々細し。

(235) 秋뾆飼育法試驗

德島縣蠶業試驗場 德島縣蠶試報告 4號 大正15 年 3 月

目107×支9を用む和到全薬育、全齢全葉育、全齢

全芽育、全芽條梁育をなしたるに繭絲繊度には殆ど 差を見ず。

(236) 夏秋蠶全芽條桑育試驗

福島縣蠶業試驗場 福島縣蠶試報告1號 昭和2年 3月

日107×(支101×支4) を用ひ普通育、到非金芽金薬育、到非全芽條系育、到非全芽情系育をなしたるが關絲繊度は年により異り一定の傾向を認めず。(287) **蠶の生理上より見たる春蠶各齢期に於ける調** 奏法の調査

東州道夫 蠶絲學報 第10卷第1號 昭和3年1月 1. 齡別試驗

支4號を用ひ齡期得に到秦育區、到非育區、全芽 育區、條桑育區に分けて試驗せるに繊康に就いて見 るに第1齡期に於ては到芽育區最も太く條桑育區價 かに納く之に次ぎ全芽育區最も細し、第2齡期に於 ては劉桑育區最も太く條桑育區之に次ぎ他の2區は 共に細し、第3齡期にては劉桑育區、最も太く劉芽 育區之に次ぎ全芽育區最も細し、第4齡期は到桑育 區太く全芽育區之に次ぎ他は共に細し、第5齡期に 於ては劉桑育區最も太く全芽育區最も細し。

2. 各齡關桑組合試驗

日1號を用ひ齢別に調系法を種々組合せ11處を作り試験せり、繊度に於ては年により差異あり一定の傾向なし。

(238) 秋蠶期に於ける虛弱蠶兒の全芽育試驗

和歌山縣蠶業試驗場 和歌山縣蠶試報告10號 昭 和3年7月

日107×(支9×支101)を用ひ普通育、稚蠶到芽、 稚蠶は特に育成したる全芽育、とす。繭絲繊度には 差なし。

(239) 全葬育に關する試驗

京都府鑑試 京都府鑑試報第3號 昭和5年2月 支7×歐7を用ひたるに繭絲繊度は概して全芽育區 は剉芽育區より太き傾向あり。

(240) 秋蠶期に於ける全芽による稚蠶飼育試驗

岩手縣蠶試報告14號 昭和5年3月

日110×支102を用ひ 全芽属と 倒桑属とを 設けた り。 繭絲繊度は全芽區太き傾向あり。

(241) 飼育法に關する試驗

長崎縣蠶業試驗場 長崎縣蠶業試驗場報告第1號 昭和5年8月

1. 春蠶期に於ける試験

支4×歐1を用ひて剉桑育、多桑育(給桑量前者の 2倍)、全芽育、條桑育、ボール箱育(稚蠶期のみ行 ひ肚蠶期は剉桑育と同じ)、應用ボール箱育(乾燥以外は常に開放)、行燈育の7 風を設く、桑は稚蠶期は 市平、肚蠶期は剉桑育、多桑育は改鼠、他は咎桑を 用ふ。繊度は行燈育最も太く、應用ボール箱育之に 次ぐ剉桑育は最も細きも各國の発催少なり。

2. 秋蠶期に於ける試験

日107×支9,を用ひ剉溪竹、全葉竹、全芽竹、ボール箱竹、湖布竹、行燈竹、撒土竹の7屆に分つ、 柔は稚蠶期は改鼠、肚蠶期は全珠竹は改鼠、他匯は 魯桑を給與す。織度は全芽竹最も太く温布竹最も細 し、されど各區間の選顯著ならず。

(242) 秋期飼育法試驗

廣島蠶試庄原支場廣島蠶試庄原支場樂報。昭和 6 年 3 日

日110×支103を用ひ第1 両 (普通育)、第2 両 (全 齢全事育)、第3 両 (全事條系育)、第4 國 (全齢條系 育)、第5 區 (活系育)としたるに關絲機度は年によ リー定の傾向を示さず。

(243) 審期飼育法試驗

廣島蠶試庄原支場 廣島蠶試庄原支場彙報 昭和 6年3月

日1×支4,支7×限7を用ひ第1区(普通育)、第2 区(全船全事)、第3区(全事條系育)、第4区(全船 條系育)、第5区(稚觀活系育)に分ちたるに連絲載 度は年により一定の傾向を示さず。

(244) 經濟育に關する研究

近藤彦助、野口武 愛媛縣蠶試報告 第22號 昭 和6年3月

鑑品種は日107×支4號、日110號×支105號を使用 し、標準區は稚蠶期改良鼠返、北蠶期餐桑を、給與 全齡全芽區は改良鼠返を、稚蠶全芽底は稚蠶期改良 鼠返全芽育肚蠶期餐桑全葉育を、壯蠶全芽育區は稚 蠶期改良鼠返剉桑育壯蠶期同桑全芽育を、特殊全芽 育は稚蠶期餐桑質生全芽育壯蠶期餐桑の全葉育を行 ふ、繭絲織度を見るに其の細太に關しては確然たる 傾向を認め難し。

(245) 春蠶飼育法試驗

山中德三郎、羽垂貞秋 - 鹿兒島縣蠶試々驗報告 第4號 - 昭和6年8月

試験區は到桑全芽育區、到李全芽育區、條桑育甲區、條桑育乙區、函飼育區、活條育區に分ついづれ も稚蠶期に於ける區別なり。但し條桑育甲區は1齡 ~2齡到芽3齡全芽4齡~5齡條桑育にして條桑育乙區 は1~2齡到芽3~4齡全芽、5 齡條桑育なり。又活條育 區は1~3齡活條育壯蠶期條桑育なり。供試蠶品種は 日1×支4にして桑品種は稚糕期改鼠、肚蠶期咎桑を 用ふ、繊皮は到芽全芽育區最も太く剉桑全芽育區之 に次ぎ、活條育區最も細し、されど各區の差大なら ず。

(246) 夏秋蠶育成稚蠶用獎飼育試驗成績

高須兵司、中村治太郎 · 青森蠶試報告第2號 昭 和7年5月

改良鼠返を用ひ秋試婦立前摘芯、摘葉を行ひ腋芽を渡育せしめ試品種は日110×支105其の他2品種を用ひた。試験區は金芽育、金葉育、到芽育、對照區としたるに繊度は金芽育最も太く金葉育最も細し。

(247) 稚蠶飼育法試驗

栃木蠶試 栃木蠶績昭和7年10月

希羅期は普通到录育、撒土育、條系育、理鉛箱到 芽育、理鉛箱條系育とし、秋羅期には普通到系育、 金葉育、金季育、條柔育、理鉛箱條系育、埋條全芽 育とし 晩秋觀期には 秋霞の 區別中埋條全芽育を 缺 く。茶は 日1×支4, 秋け碧旭×晃龍、晚秋は日 110 ×支102を使用せり。繭絲織度は発は條系育、 撒土 育最も太く理鉛箱到芽育最も細し。秋は埋條全芽育 最も太く普通到系育最も細し。晚秋は條系育全芽育 最も太く他は之より細し。

(248) 夏秋蠶飼育に關する試驗

雷秀雄 長崎縣蠶業試験場報告第2號 昭和8年 12月

1. 普通育と倒芽育との比較試験

日110×支105を用ひ稚識到柔肚蠶金葉の普通育と 稚蠶到芽肚蠶金葉との二属に分けて試驗す桑は稚蠶 期は改良鼠返肚蠶期は魯桑を給與す。繊度は大差な し。

2. 普通育と平座育(平銅)との比較試験

日110×支105を用ひ稚蠶期は一様に普通育となし 肚蠶期に於て普通育區と平飼育區とに分つ。桑は秋 期には稚蠶期改良鼠返、肚蠶期魯桑を用ひ、晩秋期は 全齢魯桑を給與す。繊度は秋期にては平飼育區の方 普通育區より常に大なるもその差顯著ならず又晩秋 期にては普通育區の方わづかに太し、從つて一般的 に見れば二屆間に一定の傾向なきが如し。

3. 稚蠶飼育法と平座育との關係試験

日110×支105を用ひ稚蠶普通育、肛蠶平座育區と 稚蠶到芽育肛蠶平座育區とに分けて試験す、発品種 は稚蠶期は改良鼠返、肛蠶期は各菜なり、繊度は稚 蠶到芽育肚蠶 平座育區の 方細きも その 差顯著なら ず。

4. 普通育區と稚蠶剉芽育壯蠶平座育區とに分けて

兩區を比較調查す、供試器品種は目110×支105,及 支105×日110なり。桑品種は普通區は金齡餐桑を、 他區は稚蠶期には改鼠、市平、大薬早生、批蠶期に は餐桑を給與す。繊度は常に普通區の方細きもその 差顯者ならず。

(249) 箱飼に於ける調桑型式に關する試驗

宮崎重美 京都府鑑試彙報第5號 昭和10年10月 秋鑑期日110×支106を用ひ到発育、全葉育、到芽 育、全芽育、條発育を本籍と濕布剛區の下に行ひた るに繭絲繊度は條発育は細きも他は一定の傾向を示 さず。

(250) 箱飼に於ける調桑形式に關する試驗

山口縣蠶業試験場 山口縣蠶試棄報第6號 昭和 11年3月

其他 (263) (298) (433) (17)

試験例により差異あれども概して鑑度而積廣き場合及び標準區等に繭絲織度太き傾向あり。

(251) 耀座面積試驗

田非保次 郡是試驗成績 大正13年

支7×阪7を用ひ4齢蠶を确食より標準底(尺坪140頭)、厚飼属(200頭)、薄飼属(80頭)となし5齢起蠶とならば各區蠶を更に標準區(70頭)、厚飼區(100頭)、薄倒區(40頭)に分ちたるに繭絲繊度は薄倒區最も太く標準區之に次ぎ厚飼區最も細し。4齢、5齢のみの試験にても傾向相等し。

(252) 條獎育蠶兒粗密育試驗成績

西川砂 岐阜蠶試報第3號 大正14年5月

四齢鐵兒を分ちて對一平方尺蠶兒の頭數を60,90 120,150,180,210,240,270,300の9属に分けた。

2 270頭及300頭の兩處加し。 270頭及300頭の兩處加し。

(253) 課座面積に関する試験

古性淡次郎 秋田蠶試蠶事報告第8號 昭和7年4 月

五齢諡を尺坪收容頭數100頭,110頭,130頭,150頭としたり。供試諡品種は支105×日110。繭絲繳度は各區間に一定の傾向を認めず。

(254) 夏秋盆條桑育の蠶座面積に關する試驗

小畸息一、水野保、熊谷勇一 茨城蠶試報第4昭 和8年3月

五齢期條案育に於て、標準、2割5分減、5割減、本場標準の4區別とし蠶品種は目110×支105を供用せり。繭絲織度は初秋蠶期には標準區最も太く5割減、本場標準の兩區細し。晩秋蠶期には各區間に大差なし。

(255) 春瀬屋外條桑育の縲座面積に關する試驗

水野保、淺羽登代夫、高野平、仮村重男 茨城蠶 試報第4 昭和8年3月

5 齢期條桑育の尺坪取容頭敷により、190頭、170頭、150頭、150頭、110頭、90頭の6區別とし支13× 酸16を用ひたり。繭絲繳度は各區間に大差なきも頭 数多き區は稍々細き傾向あり。

(256) 夏秋観平飼の耀座面積に關する試驗

水野保、淺羽登代夫、高野平、倾村重男茨城蠶試報 第4昭和8年3月

五齢期平何に於て尺坪收容頭數により、115 頭、105頭、95頭、85頭、75頭の五區とし、蠶品種は日 110×支105を用ひたり。繭絲織度は秋蠶期には各區間に大差なきも85頭區、115 頭區稍々太し。晩秋蠶期も同様の傾向あり。

(257) 蠶座面積に開する試驗

池上郷二 長崎蠶報 第3號 昭和10年8月 試験區を大區、中區、小區に分ち斧削は國蠶支16 號×歐16號、初秋期及晚秋期は日110號×支105號、 を飼育せり、大區は薄伺にして中區の頭数の約7.6 割であり小區は厚何にして中區の頭数の約1.4倍の 頭數あり。

繊度に關しては奈、初秋期は中區最も太く、小區最も細し晩秋蠶に於ては小區最も太く大區最も細し。 3期を通じて見る時各區署しき差を認めざると難も 中區は他の2個に比し稍太きが如し。

(258) 競座面積に関する試験

重栖潮十郎、金澤菜英、森山忠光、田村勝富 島 根縣蠶試報告 第25號 昭和11年3月

第5齢期に於ける鑑座面積の廣狭と鑑兒の發育及 繭質との關係を知らんとし粋は歐16×支14, 秋、晩 秋は支106×日7を用ひて試験せり。

4 眠起蠶600頭をとりて蠶座面積の廣狭により6區を設け第1 區は最も厚何ひとし第6 區は最も薄何とせり。荷後4 齢期の蠶座面積との關係を知らんとして5 區を追加して試験せり。試験成績中繊度に就いて見るに厚倒は最も細し倚又第5 齢面積を同一にし第4齢を異にする場合は第4 齢面積狭きものは細く

廣きものは太き場合多し。

(259) 鷲座面積に関する試験

近栖瀬十郎 金澤楽英 他2名 島根鑑試報告第2 5號昭和11年3月歐16×支14,支106×日7を用ひ鑑 座面積による繊度の細太を調査したるに発は鑑度面 程と繊度との間に一定の關係なく晩秋も同様にして 唯秋期に於て第5齢にて面積を同一になし第4齢を 異にせる場合は4齢面積狭きもの程繊度小なり。

以上の外下記の抄錄番號參照

(116) (119) (166) (172) (175) (176) (179) (184) (219) (261) (263) (269)

飼育の(10)給桑量 (質験例²²。その他催眠、**帕** 食期の給桑量の質験例⁵)

給桑回數を減少せる場合は繊度稍々細く、又給桑 量を減少せる場合に少量の減少にては影響なきも5 割位の減量に及ぶと繊度細くなる傾向多し、何又食 桑鼠の點より見て蠶座面積の狭い場合も細くなる傾 向あり。次代蠶に於てもこの傾向顯はる。何又催眠 期停食の時期、及예食の時期、抵等の調絲繊度に及 す影響を見るに停食早きもの程繊度細く又예食早き もの2例にては繊度細き傾向あり。

(260) 春羅飼育法試驗

1 小石丸を以て標準版、給桑5回(給桑量2割物)、 給桑4回(給桑量3割的)給桑3回(給桑量4割物)給 桑1回省略(終りの給桑量を5割均し、一回省略)、 眠除後停桑、に分けて試験す、繊皮に於ては5回版 1 回省略版、最も太く4回區、3回區之に夾ぎ眠除 後停桑區特に翻き感あり。

2. 小石丸を以て標準區、3 輸後天然育、3 輸前 天然育に分けて試験せるに3 輸後天然育區最も太く 3 輸前天然育區最も細し。

(261) 春蠶飼育法試驗

荒木武雄、下井盛夫外2名 京都蠶事報告第5號 明治37年6月

1. 給桑回數減試驗

小石丸を以て標準區、給聚5回甲區(全齡問每日5回給聚、給聚量2割增)、同乙區(4齡迄每日5回給聚、2割增給聚)給聚3回區(全齡問每日三回給聚5割增給聚)、眠除沙後1回給聚區、 給聚1回省略區の6區に分く、給聚5回甲區、1回省略區最も太く對照區僅かに細く之に次ぐ、丙して眠除後1回給聚區最も細し、されど各區間の達は顯著ならず。

2. 蠶座廣狹試驗

小石丸を以て鑑座面積及給桑量の多少により標準 區、5 齡2割狹區、2割狹甲區(四齡迄)、同乙區(全 齡開)4割狹甲區(4齡迄)、同乙區(全齡間)に分く、 繊度は2割狹乙區最も太く5齡2割狹區、2割狹甲 區之に次ぎ他の三區は遙かに細く中4割狹乙區最も 細し。

3. 激變溫接觸試驗

小石丸を以て標準は、溫度激變區、湍進區に分けて試験せり、繊度に於ては激變區最も太く標準區僅かに細く之に次ぎ湍進區特に細し。

- (262) 春驟飼育法試驗

荒木武雄、下井盛夫、荒木柳司 京都穩事報告 第8號 明治38年3月

1. 給桑回數試驗

小石丸を以て標準賦、給桑5回甲賦(全齢間毎日5回)同乙賦(4齢迄毎日5回、5齢4回)給桑3回甲匯(全齢間毎日3回)同乙賦(4齢迄5回、5齢4回)公棄甲賦(全齢間金薬)同乙賦(催眠後は切放桑を用ふ)眠除後1回給桑賦、給桑1回省略區の9賦に分つ但し回數の誠ぜる場合は適宜給桑量を増加す、機度に就いて見るに給桑5回乙賦最も太く眠除後1回給桑賦之に次ぎ標準區更に之に次ぐ而して他はいづれも細く金葉甲賦最も細し。

2. 蠶座廣狹試驗

小石丸を用ひ標準區、2割狭甲區、同乙區(4齢 迄)、4割採甲區、同乙區(4齢迄) 置休比例區(置 休増大に伴ひ面積及給聚量を増大)の6 區に分けて 試験す。繊度に於ては標準區最も太く、遙かに下っ て2割狭乙區之に次ぎ置休比例區最も細く4割狭甲 區次に細し。

(263) 夏蠶飼育法試驗

· 荒木武雄、下非盛夫、安江森松 · 京都蠶事報告 第9號 明治38年4月

2 記品種は2 化性以形を以てし、試験属を標準區額 座縮小區、給桑回數省減區に分けて試験す。 繊度は 2 選座縮小區太く、給桑回數減少區細し、されど各區 の差は顯著ならず。

(264) 秋麓飼育法試驗

荒木武雄、下井盛夫、渡邊準太郎 京都蠶事報告 第9號 明治38年4月

型品種は一化性青熟中集の風穴種を以てし試験區を標準區、第1給桑省略區、第2給桑省略區に分けて試験す。 繊度は標準區は他の2區より遙かに細く面して省略區は共に殆ど差異なきも第2給桑省略區

僅かに太し。

(265) 秋쬁給桑量半減試驗

德岛縣蠶業試驗場 德島蠶試報告第2號 大正13 年3月

支9×日110を用ひて鑑齢を異にして給桑量を半減 したる場合繊度に於ては1齢給桑半減區最も太く3 齢給桑半減區之に次ぎ4、5 齢給桑半減區最も細し されど各區とも大差なきも種鑑期半減値は批鑑期半 減底より稍々太き傾向を認む。

(266) 春蠶給桑量半減試驗

德島縣蠶業試驗場。德島蠶試報告 第2號 大正12 年8月

阪7×支7を用ひ録齢を異にして給養量を中減したる場合繊度は3齢給業半減賦最も太く各齢給業半減 販設も細し、而して稚蠶期給業量半減の場合各區と も標準属と殆ど差異なく非蠶期に於ける給養量半減 はいづれも標準属より細し。

(267) 秋號飼育法試驗

高杉宗治 岐阜蠶報第2 大正13年3月

何宵時期 秋期

12.0 13 797	PH-45	13 212 6 113 15	111 707 2	767317676 (3 36
區別	1.2齡	3.4%	5龄	給築法
第1回	8[ii]	7[1]	6[ii]	標準量
第1個	5	4	3 .	回數減少
第3回	8	7	6	平何青
第4區	8 -	7 ,	6	3 割增量
第5區	. 8 -	, I	6	5割減量

(回數は給桑回數を示す)

繭絲繊度は

日 107 では各區各室間に於て著しき差なきが如し、 日107×支101では第一區、第2區最大き傾向あり、 各室との關係一定ならず。

日107×浙江では第400太く第500細し。

(268) 4.5 齢期の給桑墨の多少と蟹の發育並に繭質との關係試驗

田井保次 郡是試驗成績 大正13年

支7×歐7を用ひ第1區(給桑最 4 5 輪標準量)、第2區(4 輪標準 5 輪骨量)、第3區(同 5 輪減量)、第4區(4 輪費 5 輪標準)、第5區(同 5 輪骨量)、第6區(同 5 輪骨)、第7區(4 輪減 5 輪標準)、第8區(同 5 輪骨)、第9區(同 5 輪費)、第9區(同 5 輪費)、2、5、1區太〈第6區最も細し。

(269) 飼育方法と軟化病との關係

·萩原孫三他六名 愛知縣蠶試々驗報告3號 昭和 -

6年8月

和白、和白×韓白を供試したり。

- 1. 飼育面積は標準盛及び5割減區、5割増區を設けたるが繭絲繊度には一定の傾向なし。
- 2. 給桑回數5 割成乃至5割将に於て5割減區は特に細い。
- 3. 給餐量 5 割減乃至 5 割増に於て 5 割減庫は細い
- 4. 簡食時期を 6 時, 12時, 18時, 24時後にしたものは一定の傾向ないが12時, 24時後らしたものが 稍々細い。

(270) 減食飼育が當代、次代蠶に及ぼす影響試驗

味岡秀夫、福滿直二 鹿兒島縣蠶試入驗報告 第4 號 昭和6年8月

供試鑑品種は敞7,支4なり。回滅區(一日の給聚回數の中一回按)、最減區(2割減)、標準區に分けて試驗す、織度は當代蠶に於て見るに歐7に於ては回減區最も太く、對照區最も細く、支4に於ては回減區最も細く標準區最も太し、然し次代蠶に於て見るに對照區當に太く回減區最も細し、面してその差支4に於て顯著なり、回減區と最減區との差はいづれる一般かなり。

(271) 飼育法と軟化病

松本一二他二名 愛知縣蠶試內驗報告 5號 昭和 8年8月

- 1. 給桑量の多少との關係、金黄×アスコリ、日107 を用ひ標準區、5割増、5割減の間に區を設けた リ、繭絲繊度は給桑量の少きに從ひ細くなる。
- 2. 菱凋桑給與との關係、支18, 日107×諸柱を用 ひ、標準區乃至5割減區とを作る、繭絲織度は菱 畑の甚だしき程細くなる。
- 3. 鑑座の乾濕との關係、支4×日1, 青熱×支101 を用ひ標準風、乾燥區、濕潤風を作りたるに關絲 繊度は濕潤區は太く乾燥區は標準區と差がない。 (272) **壮耀期に於ける給桑曇の多少に就て**

A demandary and a second a second and a second a second and a second a

辻本智蔵 奈良縣蠶試報第2號 昭和11年3月 蠶品種は支14×阪16(森)、日7×支106(秋)を用ひ 批蠶期給菜量により3割増属、普通魔、3割減属の3 風分したるに繭絲繊度は脊蠶にては一定の傾向なく 秋蠶にては給業量多きに從ひ太し。

(278) **給桑蟹に關する試驗** 宮崎重美 京都府蠶試 報第5號 昭和11年6月

 程度と臨絲機度との關係一定ならず。

(274) 五鰡用桑に關する試験

堀口篤二 京都府蠶試報第5號 昭和11年6月

鑑品種は支16×歐16外2品種を用ひ千松、魯桑、魯 八の各品種を2割野、標準量、2割減量と分ちたる に繭絲織度は発は各業属最も太く給業量少きものは 繊度細き傾向あり。初秋期は鲁8 属最も太く給業量 との間には一定の傾向を認めず。晩秋期は鲁八属郡 ク細く標準属最も太し。

(275) 眠離の性狀とその前後に於ける保護取扱 方法

高瀬信孝 愛知縣蠶試 試験報告 第8號 昭和11 年3月

1. 眠中及眠前保護温温度との關係

國宮×浙江を供試し、試驗原を高温室、低温室、 乾燥室、 濕測室とし各室夫々對照顾、職様入前 随、眠様入後區、眠除後區を設く對照區は眠中のみ 環境を變へた各室に入る、繭絲 線度は 各 區間に於 て一定の傾向を認め難し。

- 2. 眠中の乾濕との關係
- 供試品種を國常×新江とし、各限期を通じて 100%, 80%, 10%, 5%の四属とせり。 繭絲繊度を見る に各限期共に 5 %属物細き傾向あり。
- 3. 眠中の乾濕と食薬時濕度との關係 日110號×支106號を供試し、稚蠶期、肚蠶期、全齡 期に別ち夫々食薬中濕度を60%及90%とし尚夫々眠 中濕度を60%及90%とす、繭絲繊度を見るに脊蠶期 に於ては各區間に大差なく、秋蠶期に於ては肚蠶期 食薬中多濕眠中多濕區に於て機分細し。
- 4. 催眠期の保護取扱との關係

國富×浙江を供試し、普通區、多量實際區、少量實際區、明網入前停食區、配網入後停食區、配線沙後停食區、無停食區の七區に散く、關蘇維度は普通區稍太 く配前紹金期間長きもの程細き傾向あり。

5. 眠中保護取扱との關係

.6 起蠶の保護取扱との關係

供試品種、國富×浙江、試驗區を普通區、多量付 桑區、少量付桑區、硬業付桑區、軟薬付桑區、七分 起輸食區、起揃 6 時間後輸食區、起揃12時間後輸食 區とせり。繊度の細太を見るに軟業付桑區、普通區 七分起偷食區稍太〈、起揃 6 時間後예食區、起揃12 時間後偷食區稍細し、

7. 早期停食との關係

國常×浙江を負試す。

a. 第1齢期早期停食との關係

對照區(給桑20回) 給桑14回區給桑16回區 給桑18 回區とす、滿絲織度は對照區最も太く、給桑回數減 少と共に順次網く給桑14回區最も細し。

b. 第2齡期早期停食との關係

對照區(16回給菜)、給菜10回區、給菜12回區、給菜 14回區とす、繭絲鐵度は對照區及給菜14回區太く、 給聚10回區及給菜12回區細し。

c. 第3輪期早期停食との關係

對照區(給桑20回)、給桑14回區、給桑16回區、給桑 18回區の4區とす。繭絲繊度は對照區最も太く給桑 回數減少と共に順次細く給桑14回區最も細し

d. 第4輪期早期停食との關係

對照區(給桑20回)給桑10回區、給桑12回區、給桑14回區、給桑16回區、給桑18回區とす、繭絲鐵度は對照區及給桑回數18回區太く、給桑16回、14回、12回の順に距离給桑10回區最細し。

8. 延引餉食との關係

供試品種 國富×浙江

各齢に於て侗市環境の何如に保はらず延引輸企時間 長きに從ひ繭絲繊度太く延引輸企時間短かき程細き 傾向あり。

集他 (116)(119)(122)(149)(166)(241)(295)

飼育の(11)飼料の硬軟 (箕駿例31)

・繭綵織皮は軟葉給與の場合最も太く適葉給與之に 次ぎ硬葉給與の場合最も細き傾向あり。

(276) 桑の硬葉軟葉給與試驗

極深博昌、井原干知 長野縣松本原蠶種製造所蠶 事報告第2號 大正11年2月

標準區、稚蠶軟葉壯蠶硬葉區、全齡軟葉區、全齡 硬葉區、稚蠶硬葉壯蠶軟葉區とし歐9, 支8, 日本錦 を用ひ茶蠶期に倒育せるに繭絲繊度は歐9では標準 區敢も太く全齡軟葉區之に次ぎ稚蠶硬葉壯蠶軟葉區 最も細し。支8では稚蠶硬葉壯蠶軟葉區最も太く全 齡軟葉區、全齡硬葉區最も細し。日本錦では全齡軟 葉區、稚蠶軟葉壯蠶硬葉區網く他は大作相等し。

(277) 秋爾泰葉硬軟給與試驗

德岛縣蠶菜試驗場 德岛蠶試報告 第2號 大正12 年3月

支9×日107を用ひ蠶齢を異にし桑葉の硬軟を給與 せる場合に繊度に於ては普通區最も太く各齢軟薬 區 1齡 ~3齡硬菜區之に衣ぎ各齡硬菜給與區最も 細し。

(278) 桑葉の硬軟と蠶の發育並に繭質との關係 田井保久 郡長試験成績:大正13年

那鬼贵、S號(那是)を用ひたる場合は金齡、稚蠶、 肚蠶別に硬軟適桑を給與したるに概して繭絲織度は 硬桑給與の場合に稍々太き傾向あり(支4×大巷上) ×日本一を用ひたる場合は軟葉給與區は斷絡太し。

(279) 桑藤硬軟と灊に関する試験

德島縣穩業試験場 德島蠶試報告 4號 大正15年 3月

、支9×日107、日107×支101を用ひ富梁桑にて試験 す。繭絲繊度は硬葉區細く、軟葉區太し。

(280) 設育程度を異にする桑葉と蠶の作柄との關係試驗

近處疹助 愛媛縣鑑試報告第16號 大正15年11月 発明日1號×支4號, 秋期日107號× (支4號×支101 號)を用ひ掛立より3 眠まで硬薬、中葉、軟葉に區 別し壯蠶同一の委葉にて何育せり。繭絲織度は茶蠶 にありては軟葉區最も太く、硬葉區之に亜ぎ中葉區 最も細し、秋蠶にては硬葉區最も太く軟葉區之に亜 ぎ中葉區最も細し。

(281) 五齢期軟薬給與及絕食の影響

高橋辰治、高瀬信孝 蠶絲學報9卷第4號 昭和2年4月 日 107 を用ひ全齢標準區、全齢軟薬區、前期軟薬 區、後期軟薬區、絕食區を設け前期軟薬區は軟薬給 與日數を예食當日より滿1日間より6日間に分ち後 期軟薬給與區は標準桑給桑日數を예食當日より滿1 日より6日に分ち以後軟薬を給與し絕食區は標準聚 給與を後期軟薬區と同樣にし以後絕食せるに繭絲織 度は前齡軟薬區と標準區とにては達少きも軟桑區稍 太く、前期軟業區は後期軟薬區より細く軟裝給與日 數と繊度との間には一定の關係を認め難く、絕食區 は織度細くして食業日數少きもの程著しく細し。

(282) 葉質に關する試驗

大島顯三、松永寶 石川震試報第3號 昭和4年3月 (1) 薬質の硬軟と鑑見發育との關係 鑑品種は目110×支103を用ひ落品種は八ツ房を用

ひた。試験區は 昭和2年秋蠶期

標準區 開薬第345枚目全腳給與

第1區 開裝第2枚目以上全齡給與

第2區 開棄第6枚目以下全齡給與

昭和3年秋期

標準區 全齡普通桑

第1屆 稚蠶軟葉壯蠶普通桑

第 2 區 稚蠶硬桑壯蠶普通葉

第3屆 稚蠶普通葉壯蠶軟葉

第4區 稚蠶普通葉肚蠶硬葉

(2) 桑葉の水分と鑑見發育との關係

(A) 紊品種は八ッ房を蠶品種は日110×支103を 用び桑菜水分減粧歩合により摘葉直後属、10%減區 20%減區、30%減區の4區別とし心を秋期12齢間 給與したるに繭絲纖度は一定の傾向を示さず。

(B) 発品種は八ツ房を鑑品種は茶は日1×支4, 日110×支103を用ひた。試験區は茶は標準區、全齡 10%減、全齡20%減、全齡30%減、稚蠶10%減、同 20%減、同30%減の6區とし、秋には茶の6區と壯蠶 10%減、同20%減、同30%減の3區を加へたるに繭 絲織度は脊は水分減純葉を全齡給與の場合は水分少 きに從ひ織度細し。稚蠶期のみ之を給與せる場合は 一定の傾向なし、秋は水分減純葉全齡給與區と壯蠶 期給與區は稚蠶期給與區に比し纖度細し、且つ各給 與期を通じ水分少きもの程細し。

(3) 芽田肥に關する試験

鑑品種は日1×支4,日1を用ひ無肥厲、人獲尿區, 硫酸アンモニヤ區の3 値としたるに繭絲繊度は第一年目は無肥區最も太く確安區之に次ぎ人養尿磁最も 細し第2年目は確安區最も太く無肥區之に次ぎ人養 尿區最も細し。

(283) 桑葉硬軟に關する試驗

德島縣蠶業試験場 德島縣蠶試報告5號 昭和4年 3月

- 1. 稚蠶期に軟葉、中葉、硬葉を與へるも壯蠶普 通育ならば繭絲織度は大差なし。
 - 2. 別:鑑期には軟薬給與が太し。

(284) 桑葉の一片中に於ける硬軟部と蠶兒飼育との 關係試驗

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告 12號昭和 4 年 3月

一枚桑葉の先を軟として元を硬とす。 對照賦は普 通に1枚の薬を與ふ。日1, 日1072を用ひたるに繭絲 繊度は茶は軟葉區太いが、秋は對照區太く硬軟共に 細い。

(285) 桑葉の硬軟と蠶品種との關係試驗

宇都宮福一、沖村義清 愛媛縣蠶試報告第20號

昭和4年4月

試験區を希認及秋蠶に於ては第3 眠まで硬葉、中葉、軟葉に分ち4、5 齡は同一桑葉を給與す、與秋蠶に於ては添、秋蠶と同様のものと、金齡、45 齡、5 齡期前半、5 齡期後半、軟葉を給與したる4 城を加へ試験せり、供試蠶品種は春期日1號、支4號、歐7號、日1號×支4號、支7號×歐7號、秋蠶は日107號支4號、支101號、日107號×支9號、日107號×支101號、×支101號、日107號、晚秋蠶は日107號×支9號日107號×支9號日107號×支101號、支101號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號と日107號×支9號×日107號にして全齡祭業にて飼育せり。

- 1. 春鑑別業業の硬軟と職絲繳度の關係を見るに日 1號、歐7號。日1號×支4號、支7號×歐7號は中華 磁稍々太く硬、軟葉區に大差なく稍細し、支4號 にありては軟葉區稍太く中葉區稍細し。
- 2. 秋鷺期繁葉の硬軟との関係を見るに支4號及日 107號×支9號は中華属稍太く硬軟圏區は殆んど同 様にして稍々細く、支101號及び 日107號×(支101 號×支9號)にありては硬葉属稍々太く、中葉属稍 細し、日107號は硬葉属最も太く軟葉區最も細し 支101號×日107號は各属間に大葉なし。
- 3. 晩秋飘桑葉の硬軟との關係を見るに各品種共全 齢軟葉底及肚蠶期軟態區に於て繊度太く硬態底に 粉細き傾向あり。
- 4. 次代鑑との關係を見るに繭絲織度は春蠶に於て 支4號及び歐7號に軟葉區稍太く、中葉區硬葉區稍 くして兩者間に大差なし、日1號にありては硬葉 區中葉區太く、軟葉區稍細し。秋蠶に於て、支4 號及支101號は各區共大差なし日107號は硬葉區最 も太く中葉區之に距ぎ軟葉區最も細し。

(286) 稚蠶期に於ける桑葉の硬軟と鸞兒との關係 試驗

岩手縣蠶業試驗場 岩手縣蠶試報告14號 昭和5 年3月

春は職7, 支7×職7を用ひ普通葉(對照属),硬葉 區、軟葉區、混葉區を設けたり。 繭絲繊度は軟葉區 太し。

秋は日110×支102を用ひたり。 瀬絲機度は對照底 軟薬属等しく硬葉區細し。

(287) 秀葉の熟度と類兒發育との關係試驗

静岡縣蠶業試驗場 静岡蠶網19昭和6年3月

桑品種は十文字及び鲁桑を用ひ各々を軟葉區、中 薬區、硬薬區、混合属に分かてリ、電品種は目 107を 用ひたるに繭絲織度は初秋電期には一定の傾向を認 め難し、晩秋猛期には薬質軟い程繊度太き傾向を認 む。

(289) 濕**度及飼料が蠶に及ぼす影響試驗** 協島蠶試止原支場 廣岛蠶試庄原支場彙報 昭和 6年3月

支15×支101を用ひ各齢各發育時期に分ち硬薬 及軟薬給與に分ち更に濕潤及乾燥兩區とす、繭絲 繊度は障害區は概して對照區より太き傾あり。

(289) 着葉部位を異にする桑葉の飼料的價值試驗

大竹壬三、平田治榮 廣島鑑試雜報第3號 昭 和 6年11月

改良鼠返を用ひ越葉、上葉、中葉、下葉、對照葉 に分ち日 110, 和白を用ひ稚蠶、肚蠶、全齡に付き 行へるに繭絲織度は壯蠶期軟業給與區最も太く全齡 給與區最も細し。黍葉別には桑葉の着生部位の上部 に行くに從ひ織度太し。

(200) 晩秋鑑に於ける桑葉の硬軟と稚鑑飼育との開係

栃木蠶試 栃木蠶績 昭和7年4月

中葉區、硬業區、軟葉區、硬軟炎五區、硬軟混合 區の5區とし桑は改良鼠返根刈仕立、蠶品種は目110 ×支102を用ひた。 繭絲繊度は中葉區最も太く硬葉 區最も細し。

(291) 稚蠶用桑の硬軟立に鮮否が飼育環境を異にせる蠶兒の發育に及ぼす影響に就て

大島顯三 石川鷺試報第6號 昭和9年3月

標準區、乾燥區、濕潤區と3大別し更に各々を軟葉硬葉兩區に分ち更に新鮮紊給與と凋柔、給與に分 ち春は歐18, 歐17×支14, 秋は日110×支105, 日 110, 晩秋は日110×支105を用ひたるに繭絲織度は 春は各區の間に一定の傾向なし。秋は標準、濕潤2 區は硬葉に太く、乾燥區は軟葉に太く新鮮桑區は菱 凋桑區より太し。晩秋には各區間に一定の傾向なし。

(292) 熟度を異にする桑葉の蠶兒飼育に就て

宮崎重美 京都鑑試報第5號 昭和11年6月 桑品種は春は市平、秋は改良鼠返を用ひ硬葉、中 葉、軟葉に分ちたるに繭絲繊度は春秋共に中葉區最 も太く硬葉區之に次ぎ軟葉區最も細し。

(293) **給與桑の量及質と原藏飼育との**關係試驗 池江郷二、早崎博 長崎縣蠶業試驗場報告 第4號 昭和11年8月

試験區は硬葉區、中葉區、軟葉區に分ち更に各々 を 2倍量給桑區、適量區、半量給桑區の三つに分け 蠶品種は支 106 を用ひ初秋行ふ、供試桑は稚蠶期改 良鼠返北鷺期咎桑を給與す、繊度は硬業中薬軟薬と もに適量區に太くして2倍區半量區に於ては一定の 傾向認め難し。硬軟關係にては中葉區と軟葉區とは 著しき差異を認めざれども硬葉區は小なり。

共他 (60) (113) (116) (119) (136) (167) (29 6) (297) (298) (299) (384) (385) (20)